

市内遺跡発掘調査報告書

(平成27年度)

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

2016. 3

諏訪市教育委員会

例 言

1. 本書は長野県諏訪市の市内遺跡についての平成 27 年度発掘調査報告書である。
2. 調査主体者は諏訪市教育委員会であり、各作業及び本書編集は諏訪市教育委員会事務局が担当した。
3. 現地調査期間は遺跡ごとに記載した。整理作業は平成 27 年 12 月から平成 28 年 3 月まで、諏訪市埋蔵文化財整理室で行った。
4. 発掘作業と整理作業の分担は下記の通りである。
発掘・遺構等実測…児玉利一・増澤道夫・古畑しずゑ・神奴勝正 遺物水洗・注記…増澤・古畑
遺物実測・トレース・採拓・写真撮影・本書執筆作成…児玉
5. 各遺跡の調査記録は諏訪市教育委員会で保管している。略称・出土遺物の注記は下記の通りである。
諏訪神社上社遺跡…S J K 8 中道遺跡…N K M 6・7 金子城跡…K N J 1 1
南沢遺跡…K M I N 2 柳口周辺遺跡…Y N G 4 ハタ河原遺跡…H A T G 2
千鹿頭社遺跡…S T K A 1 2
6. 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々をはじめ多くの方々にご指導・ご協力を得た。とくに守矢氏・柳川氏には陶磁器の鑑定と様々なご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
笠原秀章 五味盛重 高木裕雄樹 中島 透 守矢昌文 柳川英司 宗教法人諏訪大社
長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課（五十音順、敬称略）

凡 例

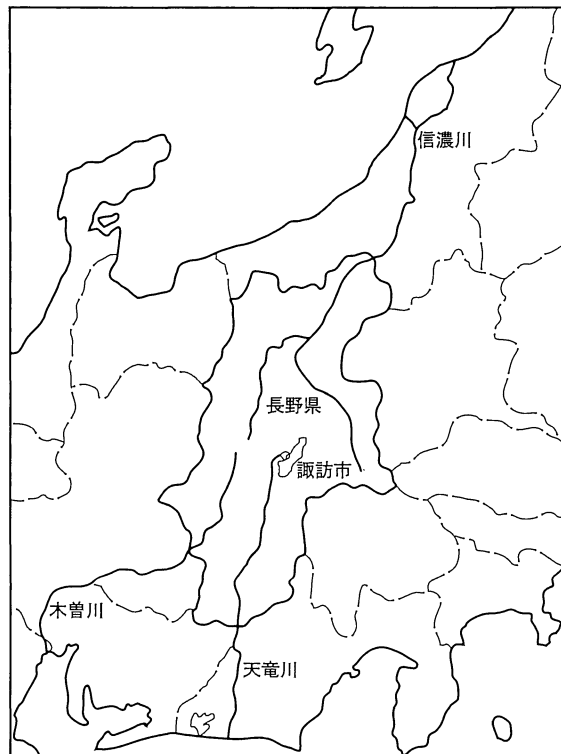
1. 本文中における水系レベルは可能な限り絶対標高を使用している。
2. 本文中第 1 図は国土地理院 平成 15 年 12 月 1 日発行 1/50,000『諏訪』と、平成 11 年 1 月 1 日発行 1/50,000『高遠』を使用し、加筆した。第 3 図は諏訪大社 平成 24 年 3 月 31 日発行『信濃國一之宮諏訪大社上社本宮建造物調査報告書』119 頁「図 1 配置図」を使用し、加筆した。
第 4 図は宗教法人諏訪大社 平成 27 年 8 月発行『重要文化財諏訪大社上社（本宮幣殿・本宮拝殿・本宮左右片拝殿・本宮脇片拝殿・本宮四脚門）保存修理工事報告書』13 頁「図-3 各棟平面配置図」を使用し、加筆した。第 24 図は国土地理院 平成 15 年 12 月 1 日発行 1/50,000『諏訪』を使用し、加筆した。上記以外は諏訪市役所発行の都市計画基本図を使用した。その他、他書などからの転載は図ごとに記載している。
3. 遺物番号は実測図版と写真図版で一致する。写真図版のうち、遺物は縮尺を約 1/2 に統一している。
4. 遺物観察表の法量欄で、() は推定復元値である。

目 次

例言・凡例

目次

I	市内遺跡発掘調査について	1
II	諏訪神社上社遺跡（第8次）	3
III	中道遺跡（第6次）	7
IV	金子城跡（第11次）	9
V	南沢遺跡（第2次）	12
VI	中道遺跡（第7次）	14
VII	柳口周辺遺跡（第4次）	15
VIII	ハタ河原遺跡（第2次）	22
IX	千鹿頭社遺跡（第12次）	25
	写真図版	27



I 市内遺跡発掘調査について

1 今年度の発掘調査

諏訪市内には現在 220 箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの包蔵地内における開発行為は例年発生しているが、以前に多かった規模の大きな開発事例は年々少なくなり、近年では個人住宅建設などの小規模なものが主体となっている。諏訪市教育委員会ではこれらの開発行為に迅速に対応するため、国庫補助事業として「市内遺跡発掘調査等事業」を実施し、埋蔵文化財の保護を図っているところである。

本年度の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為に伴う発掘届および通知の提出は 19 件あった。件数は昨年より倍近い数である。また、土地開発や売買に関連した事前確認や照会もある。これらのうち、8 件について試掘・確認調査を実施し、本書でその内容について報告したい（第 1 図）。

・補助事業決定の経過（抄）

平成 27 年 2 月 5 日付け 26 生学文第 98 号

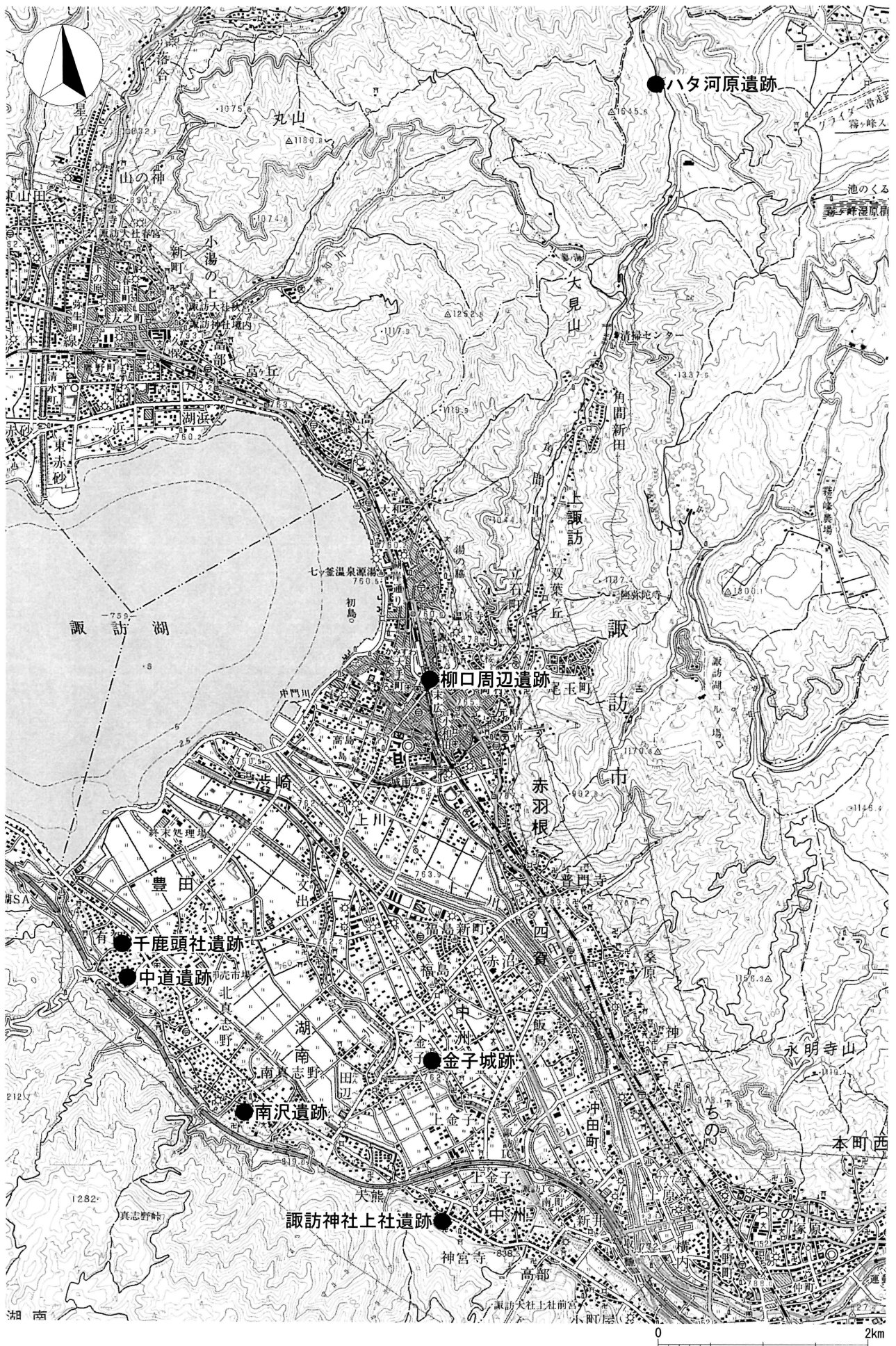
平成 27 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書

平成 27 年 4 月 9 日付け 26 庁財第 542 号（長野県教育委員会指令 27 教文第 1-32 号）

平成 27 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書

2 調査組織

調査組織名	諏訪市教育委員会
調査主体者	小島 雅則（教育長）
事務局	高見 俊樹（教育次長） 亀割 均（生涯学習課 課長） 田中 総（生涯学習課文化財係 係長） 関沢 佳久（生涯学習課文化財係 主査） 尻玉 利一（生涯学習課文化財係 主任 調査担当者）
調査参加者	神奴 勝正・古畑 しずゑ・増澤 道夫



第1図 平成27年度調査遺跡位置図 (S=1/50,000)

II 諏訪神社上社遺跡（第8次）

- | | | | |
|---------|----------------|---------|---------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市中洲宮山1 | 4. 調査目的 | 石畳敷設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成27年4月16日～17日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 3.5㎡ | 6. 出土遺物 | なし |

7. 遺跡概要及び調査概要

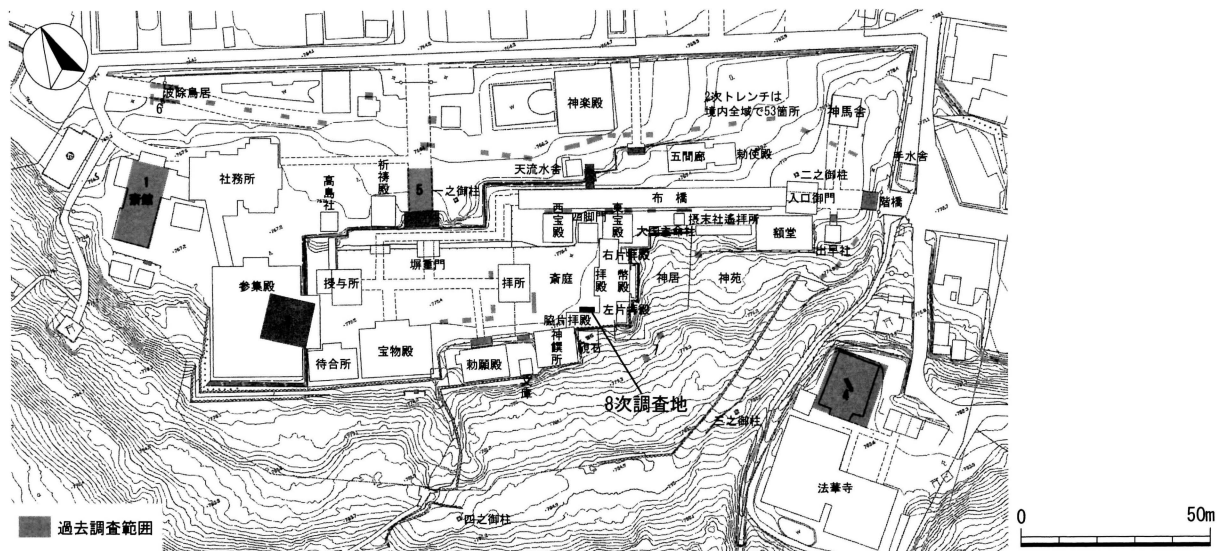
諏訪神社上社遺跡は全国の諏訪系神社の総本社、諏訪大社の上社本宮境内地である（第2図）。現在地に鎮座した年代について正確には分かっていないが、奈良時代にはすでに存在していたという。守屋山麓の末端に鎮座し、かつて諏訪湖がすぐ北側まで広がっていたことから、北端には波除（なみよけ）という鳥居が現在も建つ。背後の神体山は長野県天然記念物にも指定されている貴重な樹叢である。境内は山麓端の傾斜地を造成して構成され、幣殿・拝殿（以下、幣拝殿と略す）・四脚門などのある上壇、布橋・勅使殿などのある中壇、神楽殿・社務所などのある下壇の3つに分けられる（第3図、諏訪大社2012）。これまでに7次の発掘調査が実施され、境内全域から中世のカワラケや中・近世の陶磁器が出土している。ただし、明確な建物遺構は検出されていない。

諏訪大社上社本宮では、平成24年度より国重要文化財に指定されている幣拝殿・右片拝殿・左片拝殿・脇片拝殿・四脚門の保存修理工事を実施した。これに伴い、建物のある斎庭（ゆにわ）内の石畳についても整備することとなった。斎庭の大部分は以前から石畳が敷設されているが、一部が未舗装で、その部分にも石敷きにする計画である（第4図）。未舗装部分は脇片拝殿沿いの19㎡と西宝殿側の板塀沿い22㎡である。境内全域が包蔵地指定されていることから届出書の提出と、工事内容について関係者との協議を実施した。脇片拝殿沿いについては未舗装であった理由が不明で、硯石の直下でもあることから地下遺構等の存在する可能性が考えられたため、事前に試掘調査を行うことになった。

試掘トレンチは脇片拝殿に沿って1m×3.5mの範囲で設定し、人力で掘削を行った（第5図）。表層



第2図 諏訪神社上社遺跡位置図（S=1/6,000）



第3図 諏訪神社上社遺跡全体図 (S=1/2,000)

の 5cm から 10cm は砂を含む灰褐色土で現地表面を平らに整地した際の土である。その下は粘性の強い礫を多量に含む堆積土が 1m 以上続くことを確認した。トレンチ中ほどでサブトレンチを設けて深掘りしたところ、西端で非常に大きいと思われる岩の一部が確認された。この岩の上面を境に下層は自然堆積、上層は堆積に乱れがあるため二次堆積または人為的な堆積土と推定した。礫は粗く割れたようなもので各層に多量に含まれる。土器などの遺物は出土していない。

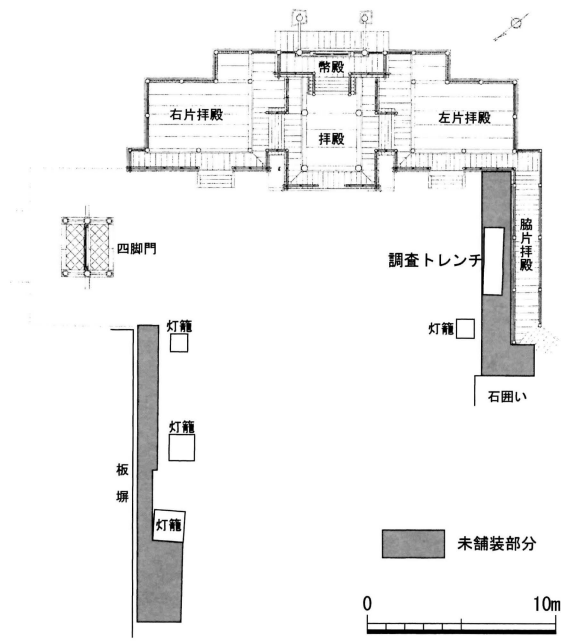
調査中、諏訪大社顧問の五味盛重氏（元文化財建造物保存技術協会）に現場視察を頂いたところ、礎石の根石とみられる石群 2 箇所があると指導いただいた。これらは地表下 5cm から 15cm の浅い範囲にあった。石群 2 については地表面にほぼ達する石も見られた。五味氏の推定では、桁方向 1 間、梁方向は四脚門側または脇片拝殿側に 1 間分ある構造の礎石建ち建物で、脇片拝殿を挟んで上方に位置する礎石を拝む施設（拝所）の可能性があるとされた。年代については近世には現在の建物配置と構造で固定化されるため、それ以前の中世に遡るものであろうという。石群 2 箇所を結ぶ軸線は現在の脇片拝殿とは並行せずわずかに北に振れる。

この所見なども踏まえて事業者などと協議を行い、根石と指摘された 2 箇所は現状のまま保護し、施工方法を変更して石畳を敷設することとなった。

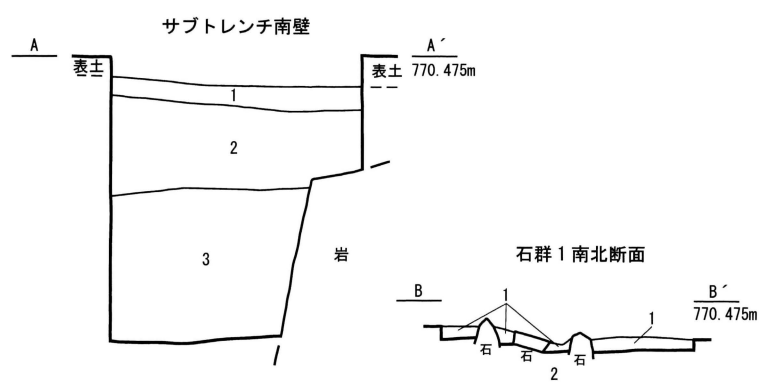
8. 総括

石畳敷設工事は狭小で掘削深度は約 20cm と浅いものであったが、現在まで未舗装であった理由が不明であったため、発掘調査を行った。その結果、表土～10cm の灰褐色砂層の下は守屋山体に由来する多量の礫と褐色粘質土が混合した堆積土が厚く堆積している状況が確認された。第 7 次調査では幣拝殿裏の斜面地を調査しているが、堆積土や遺物包含の状況は異なっており、対比して斎庭の平坦面は盛土ではなく切土によって創出されていると推定される。

今回根石の可能性が指摘された石群については表土直下から 15cm の範囲に分布していたが、その分布範囲の上部は整地のために均されているとみられ、中世に遡る遺構が元位置を保って残されていたとは考え難い。境内は古代から現在に至るまで建築と修理、再建を繰り返しており、その過程で表層は一律に造成されていると推定される。また、堆積土中には石群と同様の礫が多量に含まれており、これらとの判別がしがたい。境内で中世に遡る建物遺構は現在まで検出されておらず、カワラケなどの遺物



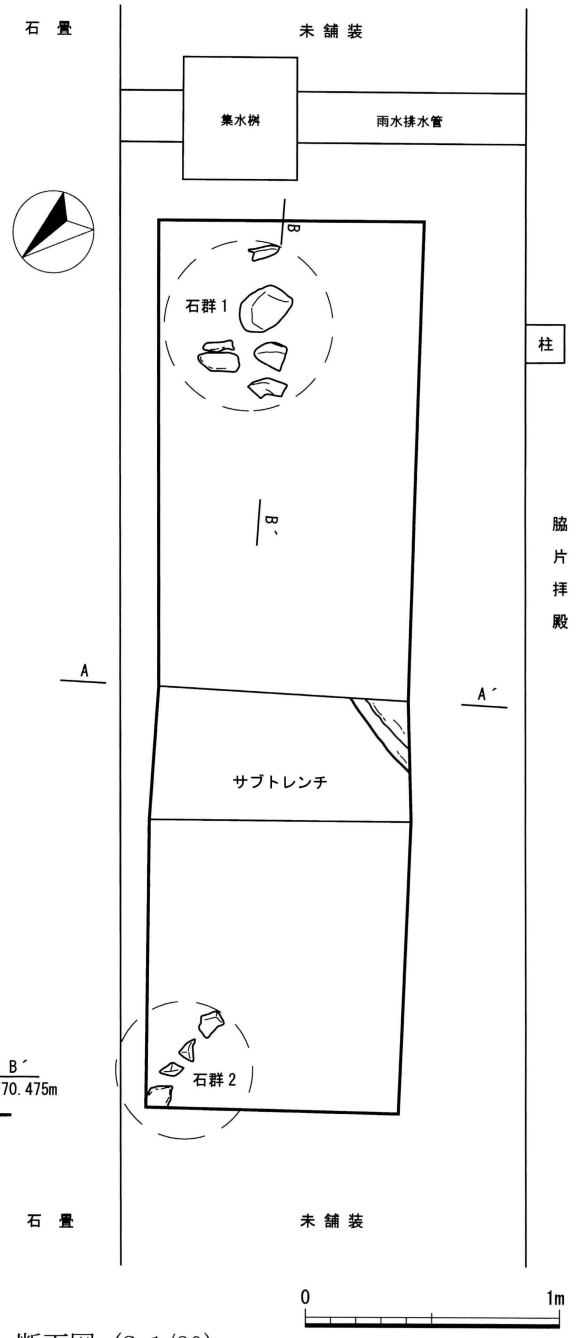
第4図 斎庭内平面図 (S=1/400)



サブトレンチ南壁・石群1南北断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	茶黄褐	細かい	ややあり	なし	ローム土わずかに攪拌され茶褐色に、小礫多量含む
2	黄褐	細かい	あり	ややあり	ローム土に礫多量含む、自然堆積に見えるが造成土の可能性
3	黄褐	細かい	あり	なし	2層より黄色み弱く細かい礫多量、自然堆積、岩天端で分層

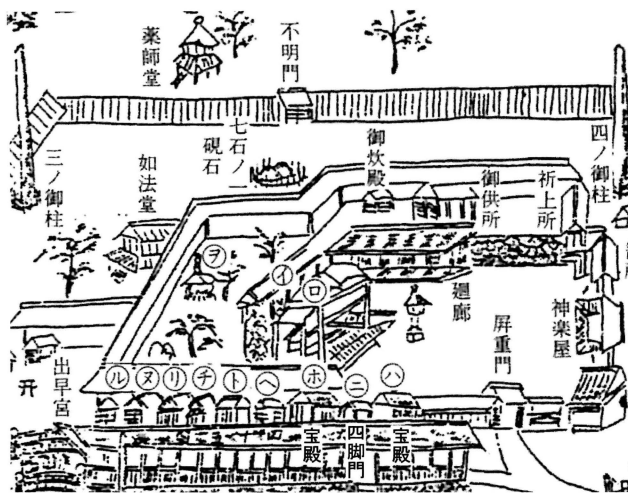
第5図 調査トレンチ平面図・断面図 (S=1/30)



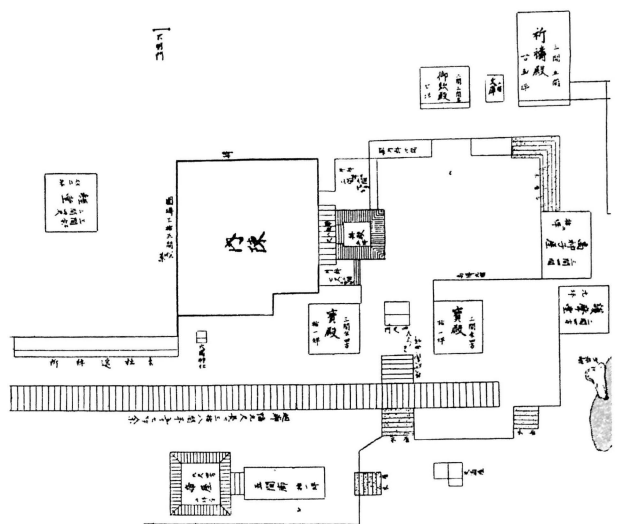
包含層は下壇を中心に比較的深い層（約 1.5m 以下）に検出されていることなども踏まえると、中世に遡る建物基礎とすることには躊躇せざるをえない。

第 2 次調査で斎庭内の試掘調査を実施しており、その報告では天正十年（1582 年）の焼失後、本宮再建工事の際に表土を削平したと考えられ、炭化物や土砂などを下方に落としたと考察している（諏訪市教育委員会 1987）。今回の調査でも炭化物を含むような堆積土は確認されておらず、現在の社殿建設にあたっては切土による整地を行っていることが推定される。今回の石群を遺構とみるか堆積土中に含まれる自然石とみるか、意見の異なる場所であったが、幸いにも現地保存されているため、今後も検討できる余地を残している。

もう一点、硯石については近世以前の古い信仰である「磐座信仰」といわれ（宮地 1937、伊藤 1942、藤澤 2012）、四脚門と神楽殿を結ぶ軸線がその信仰方向と推定されている。この硯石の位置について絵



諏訪大社上社古図 部分 権祝矢島家資料
(諏訪市 1988 より転載)



上宮諏方大明神本社絵図 部分 神宮寺区所有
(宮地 1937 より転載)

第 6 図 硯石の有無と位置が分かる絵図

画資料に見てみると、「諏訪大社上社古図」（江戸時代初期）には描かれているが、以降の資料には見られなくなる（第 6 図）。この点は古い信仰である硯石（磐座）への信仰が薄れていったことを表しているとも思われる。「上宮諏方大明神本社絵図」（寛政四年、1792 年）はその当時あった建物位置や規模がほぼ正確に示されており、貴重な記録である。沓石や池を描いているが硯石は描かれておらず、その存在の薄れを感じさせる。

以上のとおり、硯石については中世以前の信仰の拠り所ということで多くの研究がなされている。ただし、中世以前から現在位置に所在していたかは、また別の問題であろう。「諏訪大社上社古図」で硯石は幣拝殿の後方に位置して現在地とは異なっている。絵図の正確性・資料批判を考慮するとしても明らかに違っており、硯石か社殿群の位置が現在と異なっていた可能性もあるのではないか。ここでは、硯石は過去において現在地と異なる場所にあった可能性もあるのではという程度に止めておくが、現在の硯石の下には安政年間に据えられた石製支柱があるという（宗教法人諏訪大社 2015）。このことをとって、人為的な手が加わっていることは確かである。

調査から本報告までの間に、境内の近世建造物の多くが「本宮独自の境内空間の構成に欠かせない存在」などと評価され重要文化財に追加指定となったが（文化庁文化財部 2015）、それ以前の境内についてはわずかな文献資料と発掘調査によるほかない。今後も調査研究に努めていくこととしたい。

<引用・参考文献>

伊藤富雄 1942「諏訪上社の磐坐信仰と大祝職位式」『信濃』昭和十七年創刊号 信濃史学会 のち、1978『伊藤富雄著作集 第一巻 諏訪神社の研究』に収録
 宗教法人諏訪大社 2015『重要文化財諏訪大社上社（本宮幣殿・本宮拝殿・本宮左右片拝殿・本宮脇片拝殿・本宮四脚門）保存修理工事報告書』
 諏訪市 1988『諏訪市史』中巻
 諏訪市教育委員会 1987『諏訪神社上社遺跡 - 長野県諏訪市諏訪神社上社遺跡発掘調査報告書 -』
 諏訪市教育委員会 1997『改訂 諏訪市の文化財』
 諏訪市博物館 2002『描かれた諏訪社』第 33 回企画展図録
 諏訪大社 2012『信濃國一之宮 諏訪大社上社本宮 建造物調査報告書』
 宮地直一 1937『諏訪史』第二巻 後編
 藤澤彰 2012「第二章 社殿配置と祭祀形態」『信濃國一之宮 諏訪大社上社本宮 建造物調査報告書』諏訪大社
 文化庁文化財部 2015「重要文化財の追加指定 諏訪大社上社本宮」『月刊 文化財』十二月号 第一法規株式会社

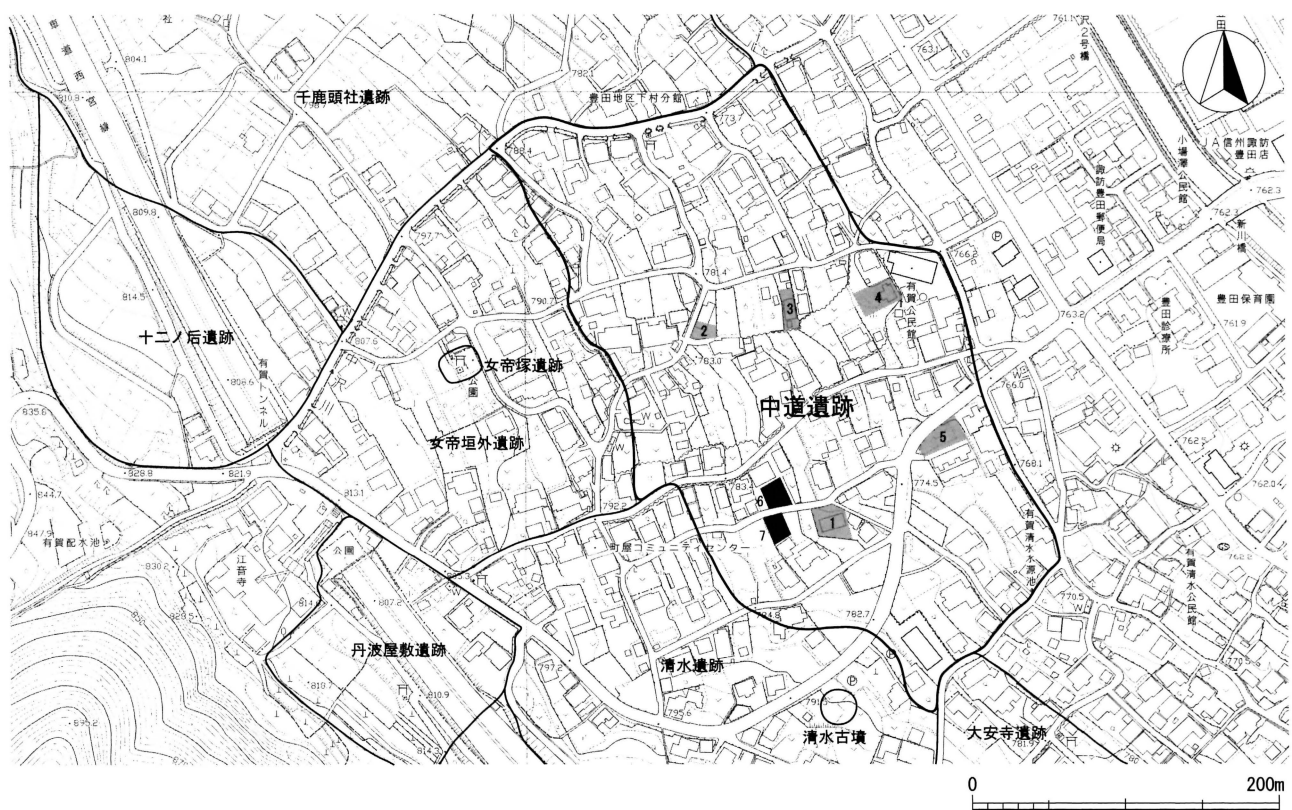
Ⅲ 中道遺跡（第6次）

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|-----------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市豊田中道 3424-5 他 | 4. 調査目的 | 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 27 年 4 月 20 日～ 22 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 4 m ² | 6. 出土遺物 | なし |

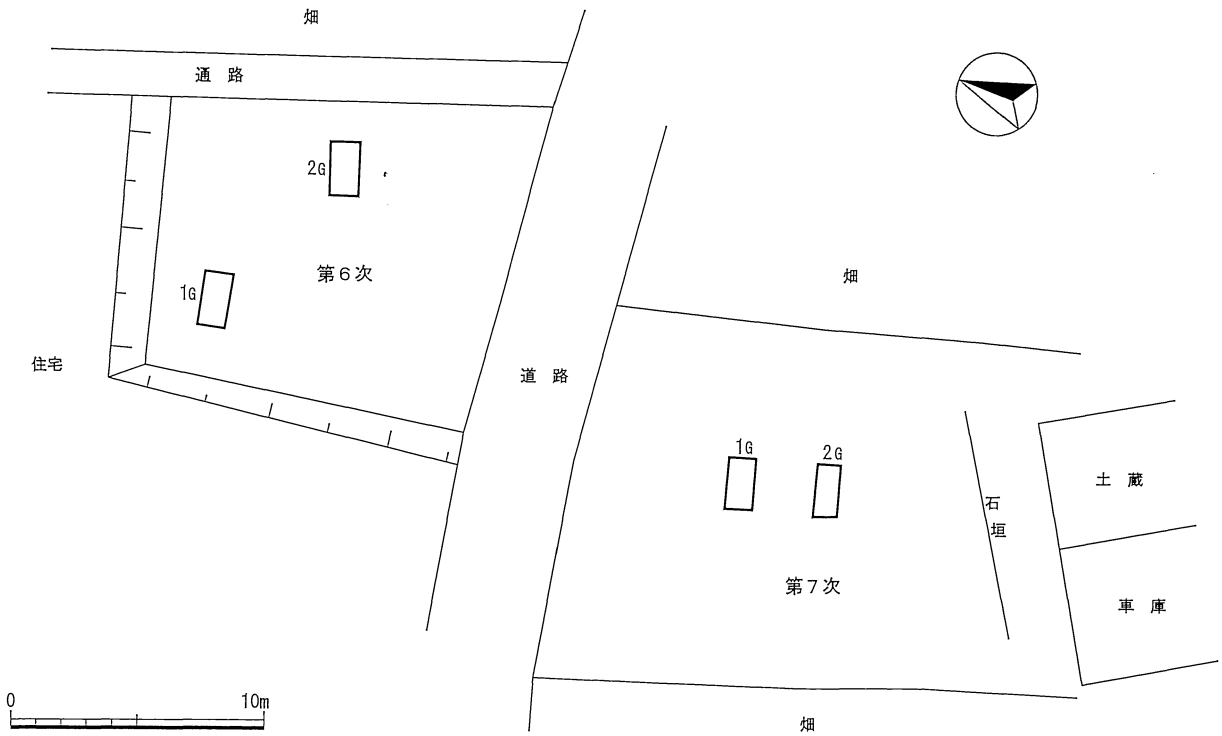
7. 遺跡概要及び調査概要

中道遺跡は守屋山麓の裾野にあたる諏訪湖西岸に位置する縄文時代から古代にかけての遺跡である（第7図）。周囲には十二ノ后遺跡や千鹿頭社遺跡、清水遺跡、大安寺遺跡などの集落遺跡が知られており、本遺跡を含めて一体的な遺跡群である。しかしながら、中道遺跡では明らかな遺構の検出例はなく、詳細は分かっていない。中沢川扇状地の下方で、南半はやや谷状に窪んでいる地域である。

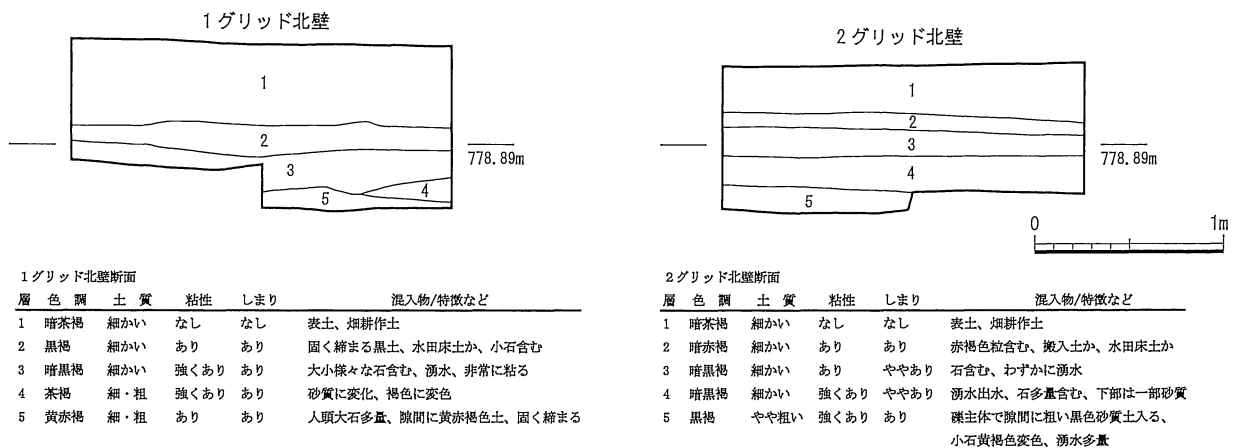
今回、遺跡中央の畑地において個人住宅の建設が計画されたため、事前に試掘調査を実施した。1m×2mの試掘グリッドを2箇所設け、人力により掘り下げを行った（第8図）。その結果、耕作土下は造成土あるいは土石流のような二次堆積土とみられる大小の石を多量に含んだ堆積が厚く確認された（第9図）。二つのグリッド間でわずかに堆積が異なるが、グリッド内の最下層は共通する堆積で、石が主体となる堆積。この層で湧水が多く出水してきた。工事による掘削範囲内に遺構等が確認されなかったため調査は終了した。遺物は出土していない。なお、本調査終了後、市道を挟んだ南側の畑地でも新たに住宅建設を把握したため、試掘調査を実施している（第7次、後述）。



第7図 中道遺跡位置図 (S=1/5,000)



第8図 調査地全体図 (S=1/300)



第9図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

8. 総括

今回の調査地点では厚い土砂堆積と地下水が確認されたが、これは扇状地の下方で、谷状地形内に位置することによるであろう。遺物が出土しないことから遺跡の分布範囲外と考えられる。ただし、さらに低い4次調査地点では、湧水のある黒色土堆積内で平安時代の須恵器と土師器がまとまって出土したこともあり（諏訪市教育委員会 2011）、単純に標高の高低で判断はできず、複雑に遺構などの分布がみられるであろうことから、今後も確認調査を実施していきたい。

<引用・参考文献>

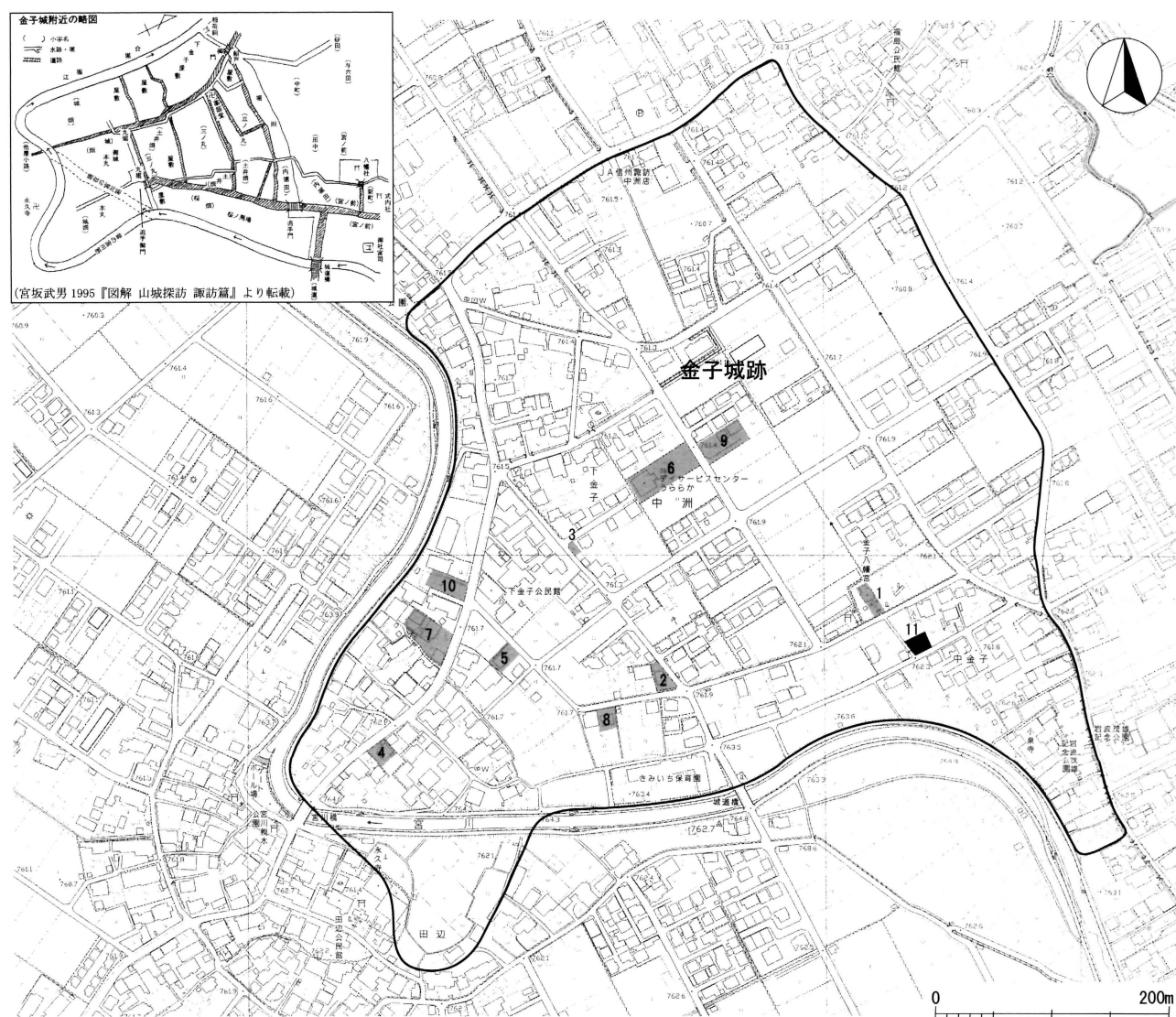
諏訪市教育委員会 2011「中道遺跡（第4次）」『市内遺跡発掘調査報告書（平成22年度）』

IV 金子城跡（第11次）

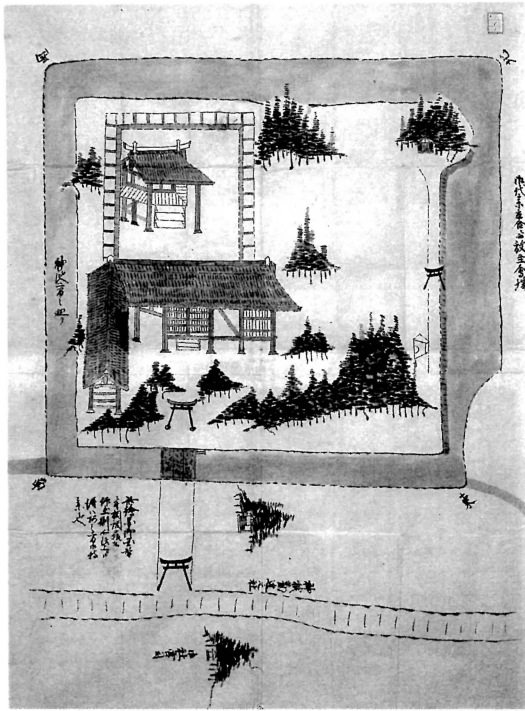
- | | | | |
|---------|------------------------|---------|---------------|
| 1. 所在地 | 諏訪市中洲内田 4012-2 | 4. 調査目的 | 土地売買に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 | 平成 27 年 4 月 22 日～ 27 日 | 5. 検出遺構 | なし |
| 3. 調査面積 | 7 m ² | 6. 出土遺物 | なし |

7. 遺跡概要及び調査概要

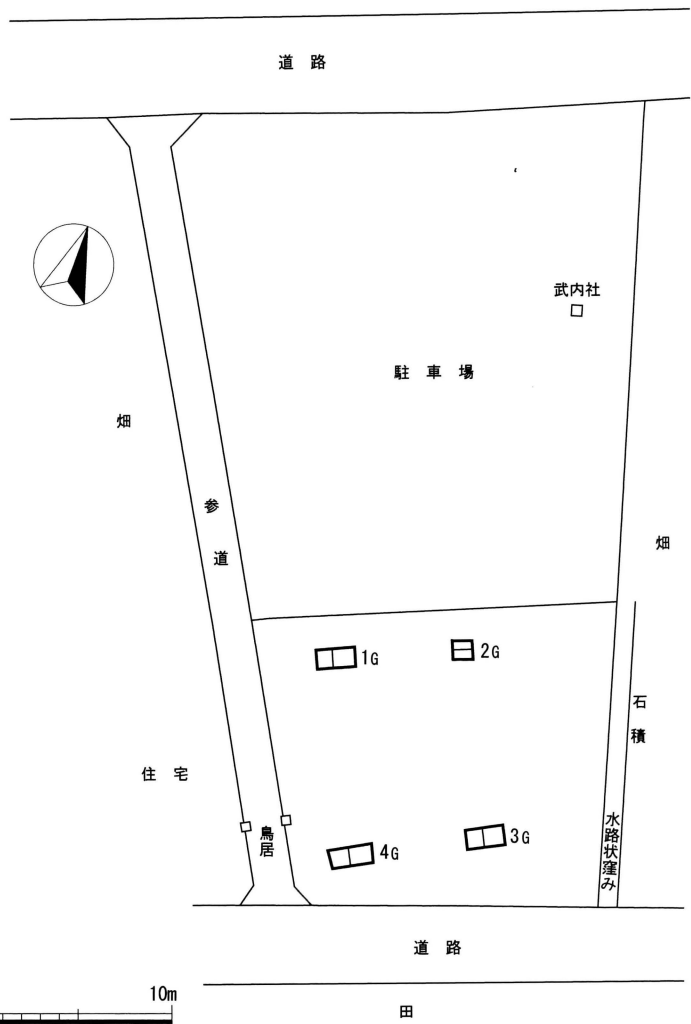
金子城跡は諏訪盆地の中央部、宮川の流れが大きく屈曲する内側に位置する（第 10 図）。戦国時代に武田氏・織田氏の滅亡後に諏訪を奪還した諏訪頼忠が天正 12 年（1584 年）に修築した城とされる。その後、天正 18 年（1590 年）の小田原征伐ののち頼忠は武蔵国奈良梨へ移り、諏訪氏の手から離れることとなる。代わって諏訪に入った豊臣秀吉の武將、日根野高吉は文禄元年（1592 年）より諏訪湖畔に新たに高鳥城の築城を始め、その城の用材として金子城の資材を取り壊して運び出したといい、現在は城と分かるものは残っていない。ただ、「三ノ丸」、「縄手」、「城畑」などの小字地名は残っており、大よその城下の作りは推定される場所である。



第 10 図 金子城跡位置図 (S=1/6,000)



第 1 1 図 八幡社絵図 部分
(諏訪市中洲下金子区 1996 より転載)

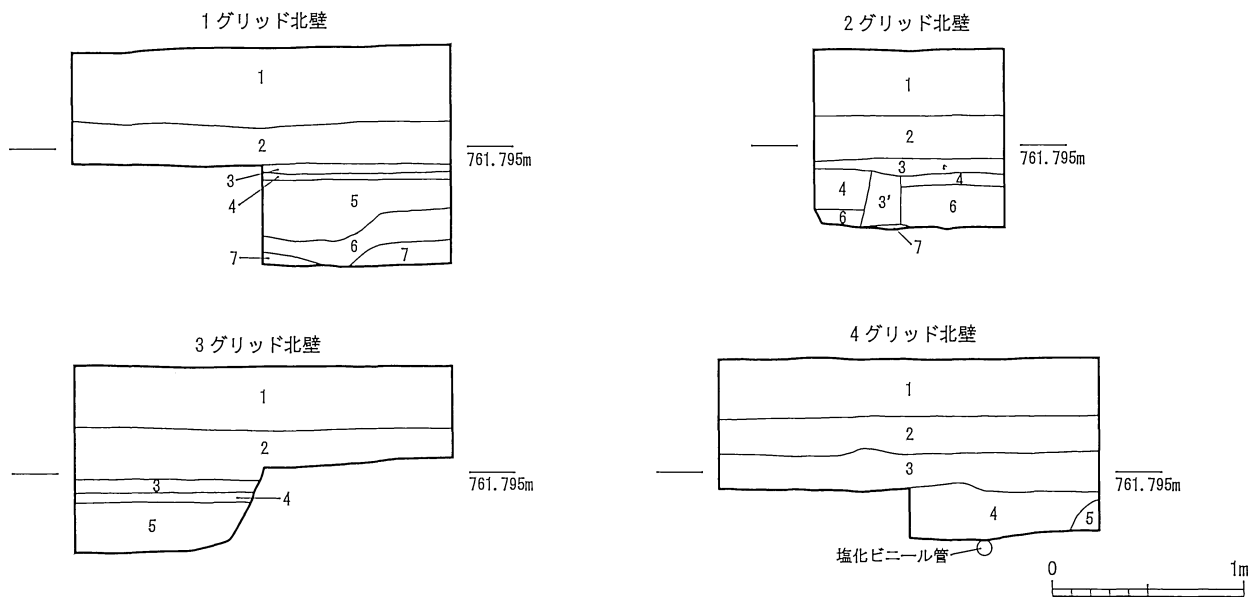


第 1 2 図 調査地全体図 (S=1/400)

金子城は諏訪で最初の本格的平城として造られ、東側以外は宮川の流路を利用した自然の堀としていた。これに人工の堀や水路を巡らすことで効率的に造られた城である。過去に 10 次の調査を行っているが、いずれも金子城に関わる遺構・遺物の出土はなく、遺跡の状況は現在まで不明である。

今回の調査地は、城の東にある八幡社の参道沿いにあたる土地である。周囲は水田および水田に盛土した宅地造成地が混在し、調査地の東側は石積があってやや高くなった畑である。八幡社は下金子地区の産土神で祭神は誉田別命。金子城の鎮守として築城時に勧請した神社で、廃城時には高島城に移されたが、のちに戻されたという(第 11 図、諏訪市中洲下金子区 1996)。八幡社の境内では社殿建替えに伴う試掘調査が平成 7 年に行われているが、遺構などは確認されていない(諏訪市教育委員会 1998)。第 11 図は頼忠が奈良梨へ持参したという絵図で、堀に囲まれた方形の境内には本殿と拝所のような建物がみられる。また、北隅と堀より南東の 2 箇所には祠のような建物がある。今回の調査地は境内から出た参道を鳥居まで進んだ交差点で、大よそ現在の景観と一致する。

調査地は現在畑であるが、過去は水田であったという。1m×2m の試掘グリッドを 4 箇所設けて、人力によって掘り下げを行った(第 12 図)。その結果、濃灰色の泥層が共通して見られ、60cm から 70cm で締まる薄い堆積層があった(第 13 図)。水田下層の鉄分沈殿と推定される。この層の下もまた泥の堆積であるが、部分的に砂質に変化したり褶曲する箇所もあった。また、縦方向に分布する土層も見られた。宮川に起因する土砂の供給や地震による歪みや噴砂痕の可能性もあるかもしれない。4 グリッドで



1グリッド北壁・2グリッド北壁・3グリッド北壁断面

層	色	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	黒暗褐	細かい	ややあり	なし	表土、畑耕作土
2	暗褐	細かい	ややあり	なし	水田土か、下部に赤色線状または粒物質、稻の根か
3	暗灰	細かい	あり	ややあり	灰色の泥が固く締まる、赤褐色粒・線状物質含む、
3'	暗灰	細かい	あり	なし	3層の灰色泥が二次的に動く、液状化か
4	暗赤黄褐	やや粗い	なし	強くあり	泥と砂が混ざる、黄色に変色、固く締まる
5	濃暗褐	やや粗い	なし	なし	砂層、きれいに厚く堆積
6	黄褐・暗赤褐	粗・粗	ややあり	強くあり	5層が黄色や赤色に変色か、固く締まる、湧水出水
7	濃灰	細かい	強くあり	なし	泥、スクモ層、黒や濃緑色の粒状・線状物質含む

4グリッド北壁断面

層	色	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	暗褐	細かい	なし	なし	畑耕作土
2	暗褐	細かい	なし	ややあり	整地土、動いている
3	暗褐	細かい	ややあり	ややあり	2層の土に赤褐色粒入る
4	暗濃灰	細かい	ややあり	あり	塩ビ管埋設土
5	赤褐	粗い	なし	強くあり	砂質で固く締まる、自然堆積、4層が切る

第13図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

は地表下 90cm で穿孔のある塩化ビニール管の埋設を確認した。穴からは水が湧き出してくるため、水田下に設けられた配水（または排水）用の管であると思われる。

低湿地に共通する泥層の堆積は確認できたが、遺構や遺物は検出されなかった。この結果から、本調査地は今後の土木工事等によって本調査を行う必要はないと確認された。

8. 総括

立地から神社に関わる遺構が存在する可能性も考えられたが、灰色泥の自然堆積が厚く堆積している状況のみで、また、昭和以降の圃場整備時に埋設されたと思われる塩化ビニール管が確認された。金子城は諏訪市内でも最大級の包蔵地面積であるが、それに相反して遺構・遺物の出土はほぼない。特に包蔵地東側の圃場整備地域（近年は宅地化が急速に進んでいる）では、試掘で検出できるものは諏訪湖・低湿地に起因する泥層（スクモ層）などである。一方で、本丸推定地は旧来からの住宅密集地で、調査はほぼ実施されておらず情報量が少ない。第10次調査では中世に遡る志野焼端反皿や近世の陶磁器が出土し（諏訪市教育委員会 2012）、遺跡西側の城郭や屋敷地には遺構などの分布する可能性は高いことをうかがわせる。住宅などの建替え時に確認調査を実施し、金子城の実態把握に努めたい。

<引用・参考文献>

- 諏訪市教育委員会 1998 「金子城跡遺跡（2次・3次調査）」『市内遺跡試掘調査報告書』
- 諏訪市教育委員会 2012 「金子城跡（第10次）」『市内遺跡発掘調査報告書（平成23年度）』
- 諏訪市中洲下金子区 1996 『金子八幡社史』
- 宮坂武男 1995 『図解山城探訪諏訪篇』

V 南沢遺跡 (第2次)

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市湖南南沢, 4617 他 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 27 年 5 月 11 日～14 日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 6 m ² | 6. 出土遺物 黒耀石 (縄文)・陶器 (近世)・樹木片 |

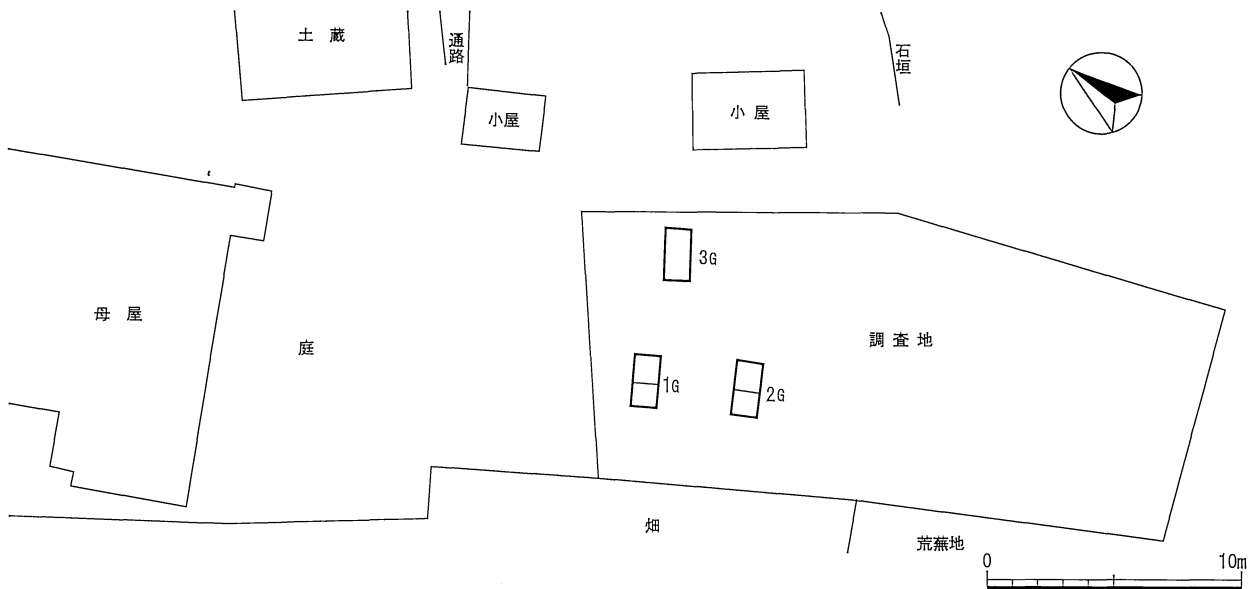
7. 遺跡概要及び調査概要

南沢遺跡は湖南南真志野地籍に所在し、松尾山善光寺の正面に広がる扇状地斜面にある (第 14 図)。西側背後の山体は中央自動車道を転換点に急激に傾斜がきつくなる。高速道路より東側は傾斜が緩くなり現在においても居住地域となっている。遺跡の南に隣接する福松砥沢遺跡では大規模な発掘調査が行われており、とくに弥生時代中期後半の集落検出例は諏訪地域では珍しい (諏訪市教育委員会 1994)。南沢遺跡の北は南沢川を境に金山北遺跡、野明沢川を境に御屋敷遺跡と続く。御屋敷遺跡では古墳時代末頃の遺構を検出している。

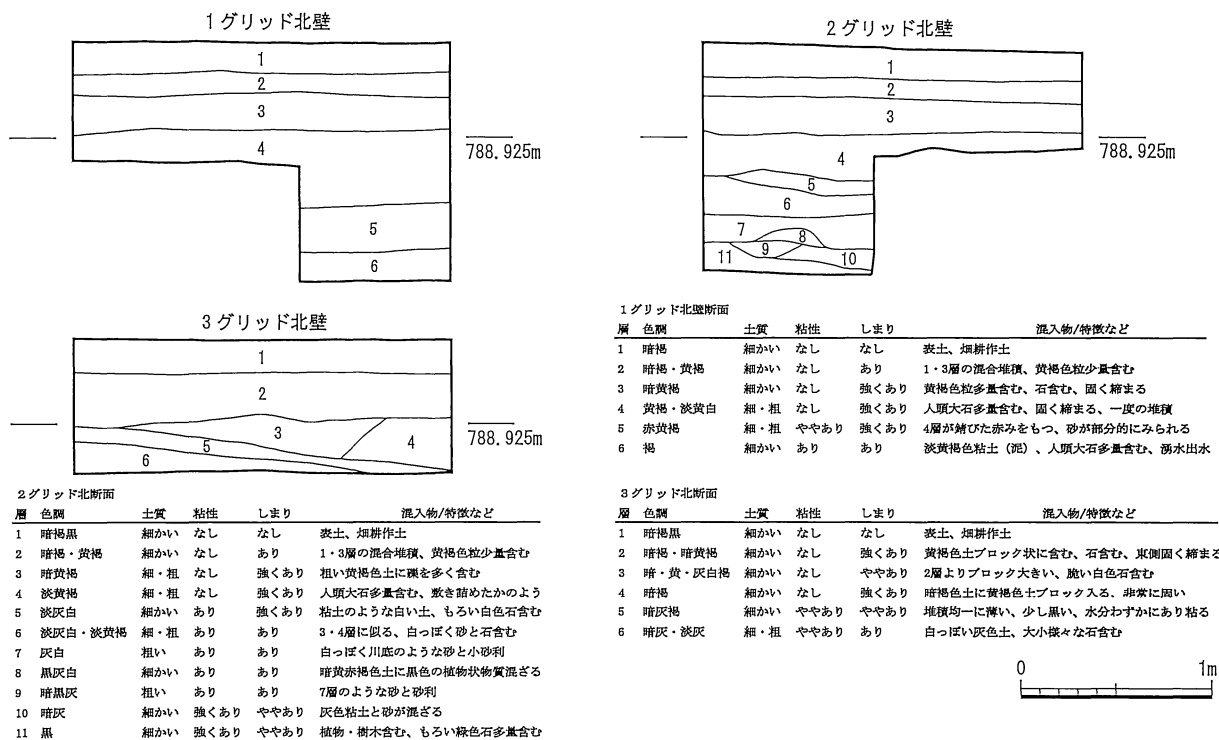
本遺跡の調査は平成 12 年度に試掘調査を 1 度行っているのみで、具体的に遺構・遺物の発見や遺跡の性格などは分かっていない。今回は遺跡東寄りの畑地にて住宅の建設を行うため、事前に試掘調査を行うことにした (第 15 図)。対象地に 1m×2m のグリッドを 3 箇所設けて人力により掘り下げを行った。いずれも 20cm が畑耕作土、その下は黄褐色土に黒色土が混合し多量に礫を含む土層 (第 16 図)。この層は土質や含まれる礫の大きさをやや変えるが 1m 程度まで続く。土石流の堆積土または他所からの搬入土と思われる。2 グリッドの 2～4 層はとくに黄色みが強く、固く締まっていた。2 グリッドの掘削最深層は砂質の黒色土で木質物が多く含まれる。枝状で明らかな加工痕は確認できなかったため、自然遺物と推定したが、広範囲に調査されれば詳細がつかめたかもしれない。今回の工事では当該土層まで掘削が及ばないことから以下の調査は行わなかった。1 グリッド 2 層から黒耀石 1 点、3 グリッド 2 層か



第 14 図 南沢遺跡位置図 (S=1/5,000)



第15図 南沢遺跡調査地全体図 (S=1/300)



第16図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

ら近世とみられる青磁碗の小片1点が出土した。

8. 総括

今回の調査地点は福松低沢遺跡の遺構分布などから、遺構分布の可能性もあると推定していたが確認できなかった。遺物も出土しないことから遺跡外ともみられるが、確認された土石の厚い堆積からはさらに深いところに埋没している可能性も排除できない。湖南地区では急傾斜で距離の短い小河川が多く、近年も豪雨による土石流が発生しているが、過去においても相当数の土石流堆積があると推定される。生活痕跡と災害痕跡の両方の把握から遺跡や土地形成の復元が必要である。

<引用・参考文献>

諏訪市教育委員会 1994 『福松低沢 - 長野県諏訪市福松低沢遺跡第2次発掘調査概要報告書 -』

VI 中道遺跡（第7次）

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市豊田中道 3442-1 他 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 27 年 7 月 7 日～10 日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 4 m ² | 6. 出土遺物 土師器・須恵器（古代）・陶磁器（近世） |

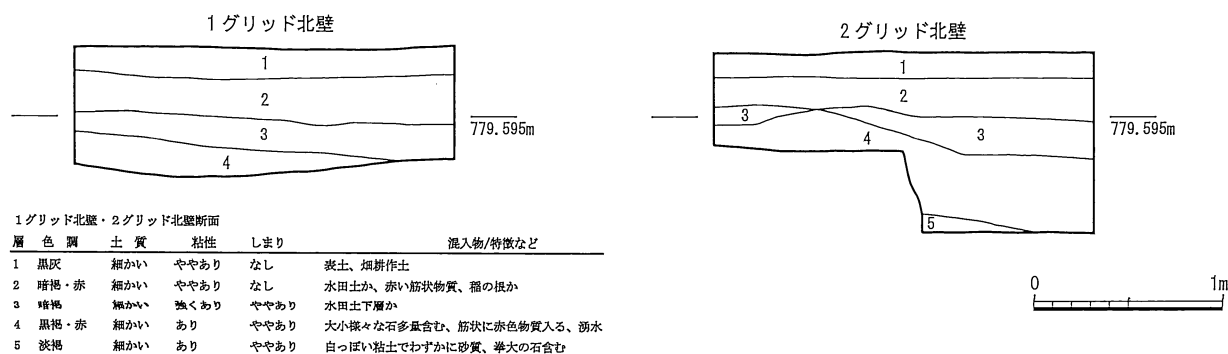
7. 遺跡概要及び調査概要

第 6 次調査地と市道を挟んだ南の畑において、個人住宅を新築するため、事前に試掘調査を実施した（第 7・8 図）。1m×2m のグリッドで 2 箇所を人力により掘り下げた。結果は自然堆積土と、一部農業用とみられる塩化ビニール管埋設の掘方を確認した（第 17 図）。遺物は両グリッドの 2 層から近世磁器がまばらに出土し、表採などで土師器・須恵器が数点確認できた程度である。6 次調査地点と同様に湧水があり、2 グリッドは石が密に含まれる堆積もあって掘り下げは時間を要した。住宅基礎の掘削範囲には遺構等の分布は確認されなかったため、以下の掘削は行わず、調査は終了した。

8. 総括

中道遺跡での調査は 7 地点に及んでいるが、一定程度掘り下げると湧水がみられる地域である。中央道から清水遺跡周辺の標高の高い場所では湧水は出ず、また、遺構の検出がされている。そして、堆積土も異なって、安定した黒土とローム土の堆積がある。標高が下がるほどに山から供給される湧水や多量の石を含む二次堆積土がみられるようになって遺構の分布が薄くなっていると考えられる。ただし、住居のような明確な遺構以外での土地利用の存在する可能性もあるので、十分に注意が必要である。

住宅建設程度の工事では地下深い部分まで掘削が及ばないため、調査において掘削することで不必要に地盤を緩くしてしまうことには慎重になる。基本土層の確認程度の最小限に抑え、そのなかで情報収集をするよう努めていきたい。



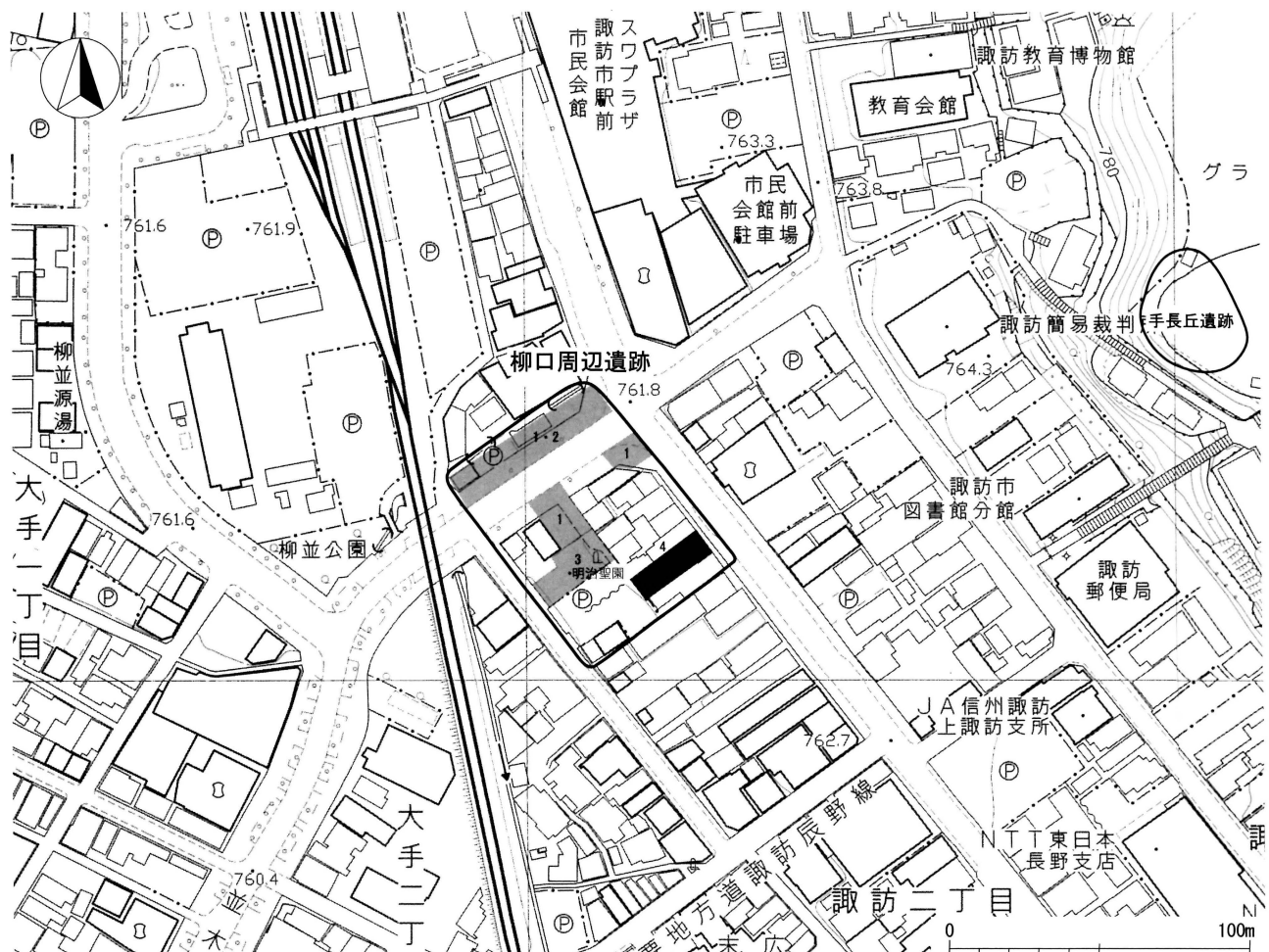
第 17 図 調査グリッド断面図 (S=1/40)

Ⅶ 柳口周辺遺跡（第4次）

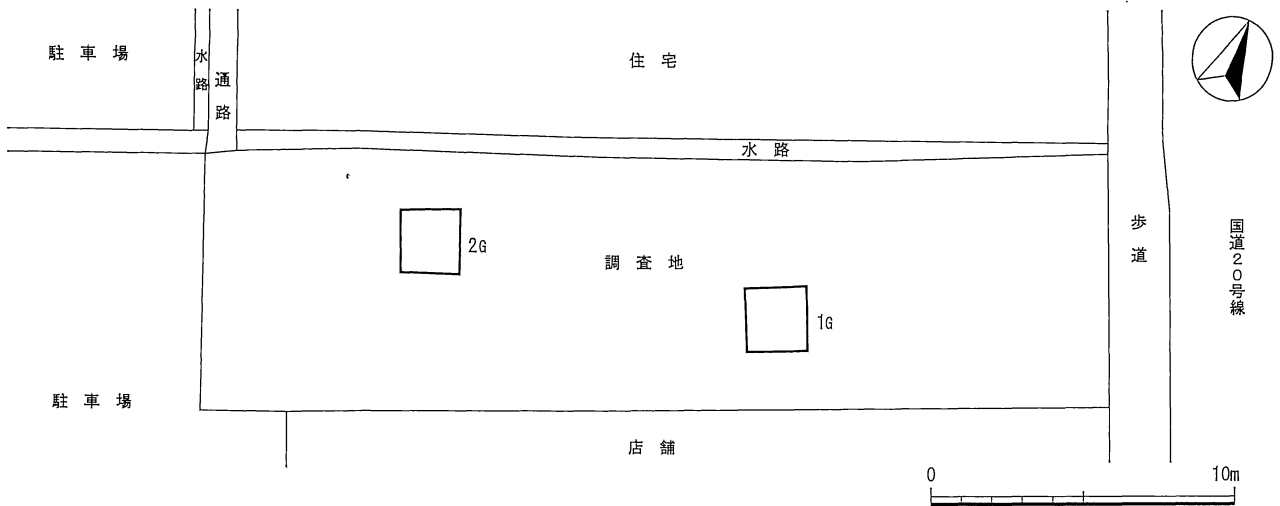
- | | |
|------------------------|-------------------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市諏訪一丁目 2989-7 | 4. 調査目的 個人住宅建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成27年8月10日～12日 | 5. 検出遺構 溝・土坑 |
| 3. 調査面積 8㎡ | 6. 出土遺物 陶器・磁器・木製品・ガラス
(中世・近世・近代) |
7. 遺跡概要及び調査概要

柳口周辺遺跡は江戸時代の高島藩の施設「柳口役所」の所在地および隣接地で、平成20年に新たに埋蔵文化財包蔵地に指定された遺跡である（第18図）。JR上諏訪駅に隣接し、国道20号線沿いでもある当該地一帯は早くから住宅や商業施設が立ち並び、遺跡の有無を把握することが困難であった。ただし、江戸時代の絵画資料などから近世以降には確実に城下町として存在したことは把握されていた。契機となったのは諏訪市市道大手・豊田線の拡幅工事および隣接する明治聖園（苑）の公園整備に先立つ発掘調査である（諏訪市教育委員会・諏訪市市内遺跡発掘調査団2009、諏訪市教育委員会2010）。調査の結果、近世から近代にかけての遺構や遺物が出土し、わずかではあるが中世に遡る遺物の出土も確認され、遺跡として認識・周知されることとなった。

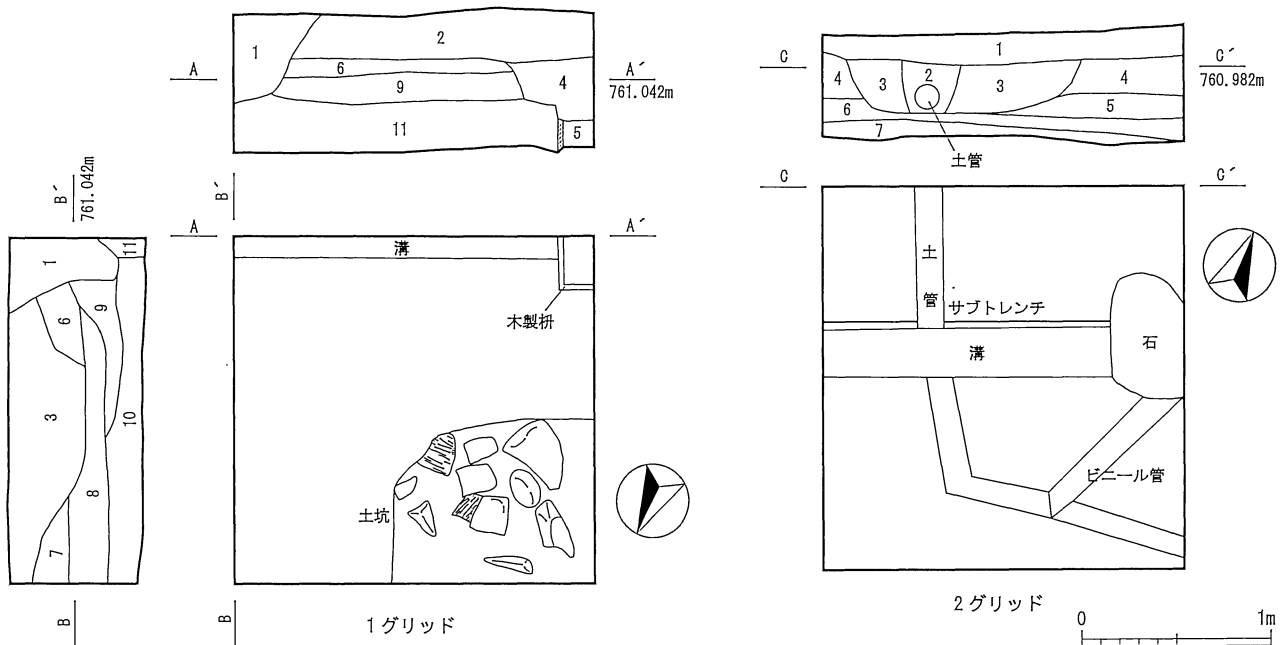
遺跡は南東700mにある高島城本丸に至る一本道「縄手」の入口にあたり、江戸時代を通じて「柳口役所」と呼ばれる藩の民政を担当する機関が置かれていた。その後、明治2年には藩校「皇学校」が置



第18図 柳口周辺遺跡位置図 (S=1/2, 500)



第19図 調査地全体図 (1/250)



1グリッド南壁・東壁断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	褐・赤褐・灰	細かい	ややあり	なし	縦に掘りこむ、底で疎層に達する
2	暗褐・暗灰	細かい	ややあり	あり	造成土、解体住宅下の整地土
3	暗褐・暗灰	細・粗	ややあり	あり	造成土、砕石や金属片含む
4	暗褐・暗灰	細かい	ややあり	なし	掘り込み埋め土、6・9層を切る
5	暗灰	細かい	あり	なし	拵内堆積土、含有物ない泥土で水生堆積のよう
6	暗赤褐	細かい	ややあり	あり	薄い層状土が重なる、固く締まる
7	暗褐・黄褐	細かい	ややあり	あり	細かいブロックまばらに入る、炭状の黒色物質少量含む
8	暗褐・赤褐	細かい	ややあり	あり	7層より色暗い、攪拌少しあり
9	暗灰	細かい	あり	あり	灰色泥に淡褐色ブロック土入る、炭少し入る
10	黒・赤褐	粗い	あり	ややあり	炭多量に含む、赤褐色ブロック土入る、陶磁器多く出土
11	暗褐	細・粗	あり	なし	東西方向に走る、石主体で隙間に泥砂入る、湧水出水

2グリッド北壁断面

層	色調	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1	暗褐	細・粗	なし	あり	造成整地土、瓦礫含む
2	暗褐	細かい	なし	なし	土管埋設土
3	黒・赤褐	細・粗	なし	なし	炭・白色粒含む、掘土か、薄い地層が幾層重なる
4	褐	細かい	なし	あり	小石含む、埋め土または盛土、地層厚い
5	淡褐	細かい	なし	あり	4層より明るい色調、4層と同時での成立か
6	明淡褐	細かい	なし	あり	ローム土に色味異なる土がブロック状に流入、一部は赤く変色
7	暗褐	細・粗	あり	あり	少し砂が混ざり大小の石を含む、水分含む

第20図 調査グリッド平面・断面図 (S=1/40)

かれ、明治12年には旧三之丸から高島学校が移転・新築されている。校舎は明治38年まで存在しており、明治13年の明治天皇行幸の際には同校に行行所が置かれた。これを記念して昭和初期に整備されたのが明治聖園（苑）である。現在の国道路線は近世の甲州道中をほぼ踏襲している。現在は遺跡北の交差点を上諏訪駅方向に直進するが、往時は交差点から一旦東に曲がって鍵の手状に湯の脇方向に進む路線であった。上諏訪駅前から続く商店街はいわゆる看板建築が軒を連ねており、近代建築の集中する地域としても重要である。

今回の調査地は国道に面する短冊状地割の一角で、以前に青果店などを営んでいたという（第19図）。

北側は隣地との間に石積の水路が流れている。石の形状や積み方が所々異なるが、部分的には古いところがある。南側は隣地との間隔はなく水路は見られないが、隣地建物基礎が石積であって、建物解体時に多量の水が湧いてきた。出水量が多く、調査地の西側には部分的に水路が残っていることから、過去には水路があったと推定される。

既存建物を解体し新たに専用住宅の建築が行われる計画となったため、遺構等の分布を把握すべく試掘調査を行った。建築範囲内の東西2箇所にて2m×2mの試掘グリッドを設けて人力で掘り下げを行った。両グリッドとも造成土や多数の人為的堆積が確認でき、遺物も陶器・磁器が多く出土した。これらは古くは中世、新しいものでは昭和の戦前頃までのものであったが混在して出土することが多く、土木工事などによる土の造成・攪拌があるとみられる。

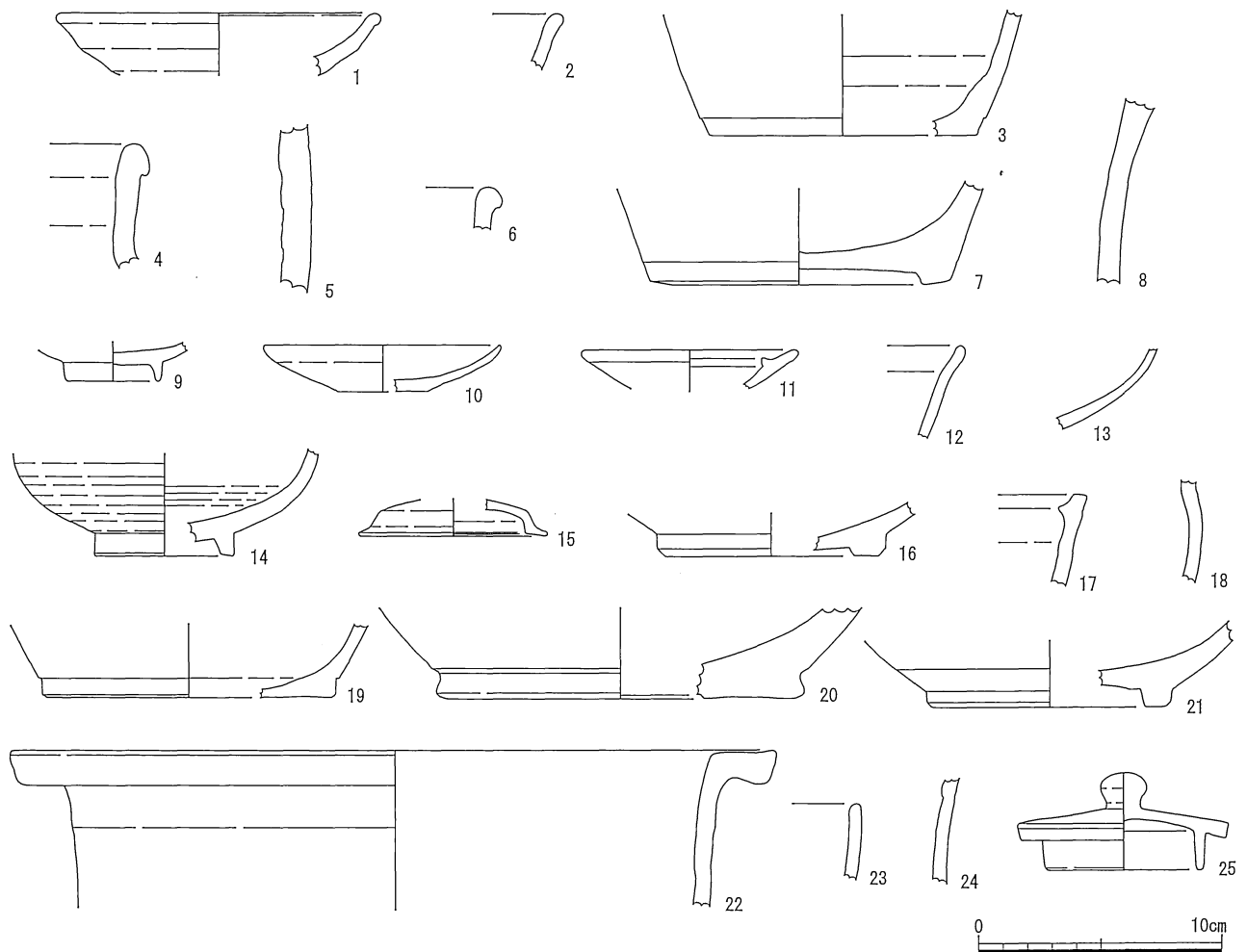
1 グリッドは2・3層は厚い堆積で、ごく新しい整地土層とみられる(第20図)。その下は薄く広がる堆積や土坑と考えられる堆積などが複数みられた。南壁沿いに東西方向に走る石主体の溝状遺構があった。その西端には木板組み合わせによる正方形の枡が確認された。枡の内部の堆積は、濃灰色のきめの細かい泥が単一で堆積しており、遺物や石などの含有物が入っていなかった。何らかを意図してあるとみられるが、枡には穴など加工はなく、具体的な利用法は不明である。グリッド北西には石と板状の木がまともな浅い掘り込みの土坑とみられる箇所を確認した。木は長方形で均一な厚さであった。埋没しており全体をみる事が出来なかった。相伴遺物がないため年代は不明である。調査で掘り下げた最下層は暗灰色から黒色に変化する砂質土で、炭化物が目立って含まれており、近世の陶磁器片を多く出土した。この深さは確実に近世に属するであろうと推定した。

遺物包含層や遺構は工事による掘削の及ばない範囲であったため、事業者と協議し現地保存とした。遺構・遺物があることが確認できたが、それが立体的・具体的に復元できる情報は得られなかった。現地保存が可能であったことから不要な掘削は行わなかったが、ある程度の面的な調査で確認しなければ、それぞれの遺構の関係や土地造成の過程を考えるのは非常に難しい。

2 グリッドは浅いところから土管とビニール管による埋設管が検出され、その下層は黄褐色土を主体に石や陶磁器片、質の異なる細かな土塊が入る土層であり、搬入土による造成と推定される。元の住宅裏に別棟で風呂があったとのことから、検出された埋設管は元の住宅に伴うものと判断された。50cmほど掘り下げたあたりで湧水がみられ、予定されている住宅基礎の下になってくることから掘り下げは終了した。1グリッドに比べて遺物は少ない。

出土遺物は陶器・磁器・ガラスがある。1グリッドからの出土が多い。具体的な数値で出せていないが近世以前のものが6割、近代以降のものが4割程度である。中世に属するとみられるものは陶器のみで、近世は陶器・磁器がある(第21図)。中世遺物は灰釉陶器皿(1・2)、祖母懷鉄釉茶壺(3)、中津川産とみられる壺甕(4～6)などである。近世遺物のうち陶器は、錆鉄釉灯明皿(9・10)、灰釉碗(12～14)、蓋(15)、鉄釉播鉢(17)、練鉢(19～21)、植木鉢(22)などで、江戸後期から幕末(1700年代後半～1800年代中頃)の瀬戸美濃産とみられる。また、瀬戸美濃以外の製品(地方窯)がわずかに含まれる。23・24は明治時代に入る地方窯産の製品と考えられ、松代や高遠、洗馬などの製品とみられる。25は瀬戸美濃または益子焼の可能性もある土瓶の蓋である。

磁器は古いものは肥前産、江戸時代末期から近代にいたる製品は瀬戸美濃産が主体を占める(第22図)。26は高台形や染付・釉薬の様子から中国産磁器と推定される。口縁がひだ状になる膾皿が5個体程度(34～36)、31～33は口縁端が無釉で四角く面取されており、体部が垂直である器形から段重とみ



第 2 1 図 柳口周辺遺跡出土陶器 (S=1/3)

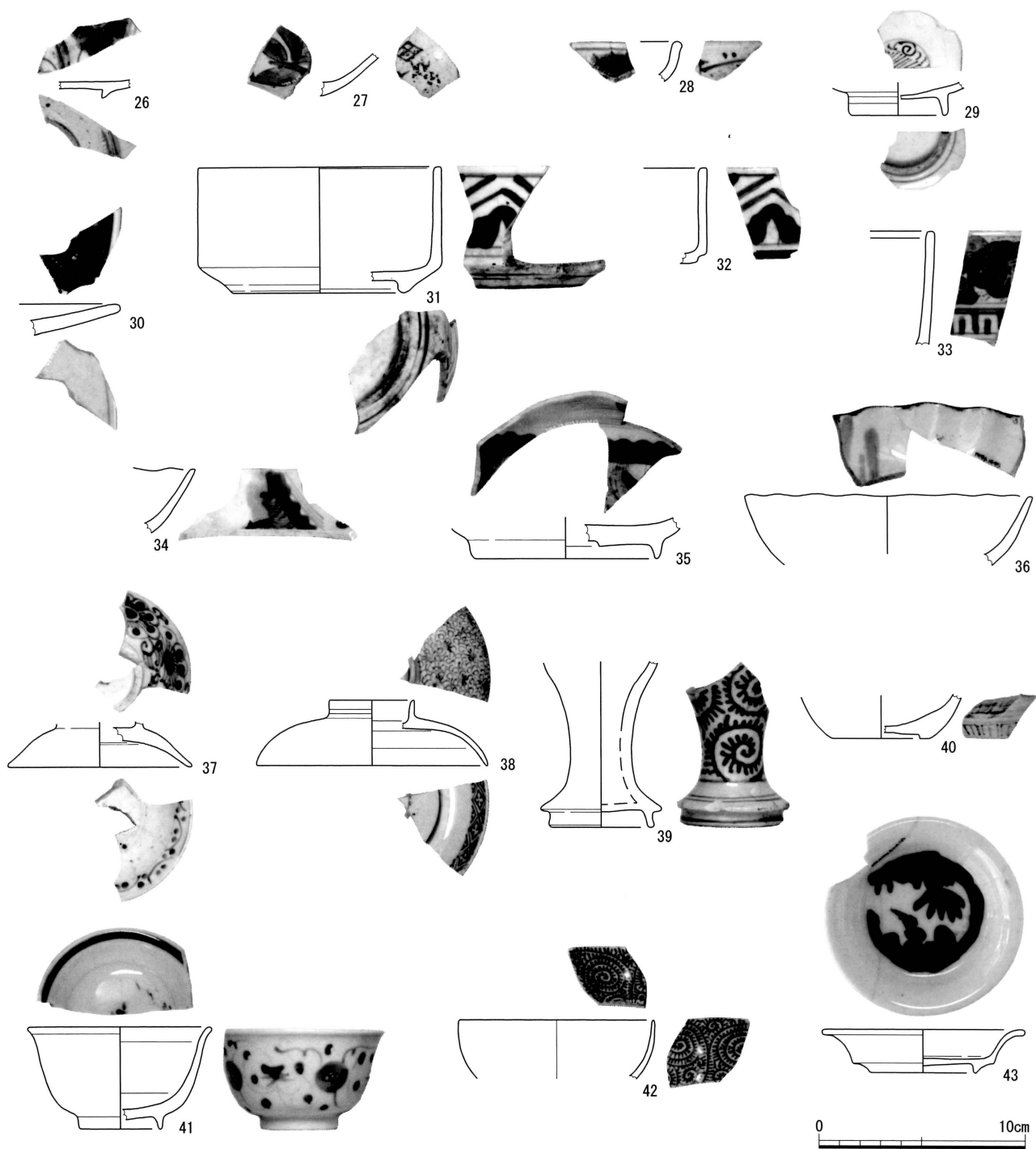
られ、3 個体ある。31 と 32 は組み製品である。徳利 (39・40) や碗蓋 (37・38)、くらわんか品 (28) が小片あり数個体分。41 は瀬戸美濃産の湯呑茶碗。掲載は近世以前にほぼ限ったが、明治期とみられるものを掲載した (42・43)。43 は出土時、内面に紅のような赤色物質が付着していた。

熱受けしたとみられる製品が多くあり、表面がざらつくものや発泡するもの (27・29・31・35・37)、黒く変色したもの (30) がある。火災などが原因として考えられる。掲載以外では、近代以降の碗・小盃・皿などがあって瀬戸美濃産である。磁器湯呑茶碗 (ゴム版転写、竹文) で「大志」銘のあるものがあって、これはおそらく本調査地から上諏訪駅側に 4 軒目のところにあった店舗「大志洋服店」(または質屋も存在) に関わるものと思われる。

8. 総括

市道拡幅工事以来の調査であったが、試掘で終えたこともあって調査成果としては限定的なものである。ただし、中世に遡る灰釉陶器や鉄釉掛けの茶壺が出土したことは注目すべき点である。近世城下町の形成以前にも茶壺を使用するような水準の生活があったことが伺われるようになった。文献資料などに様子が知られていない中世遺跡としての認識も確かにする必要がある。

出土遺物の総体からは江戸時代の前半が捉えられず、多かったのは江戸後期以降 (18 世紀後半以降) で、磁器が中心である。数量値を提示していないが、近世の磁器は肥前産が大半を占めるようで瀬戸美濃産がわずかにみられる。明治以降になると瀬戸美濃産が主体となっている。柳口周辺遺跡の過去の調査 3 次分の出土遺物は近代以降のものが 8～9 割で、近世とみられるものは非常に少なかった。調査地

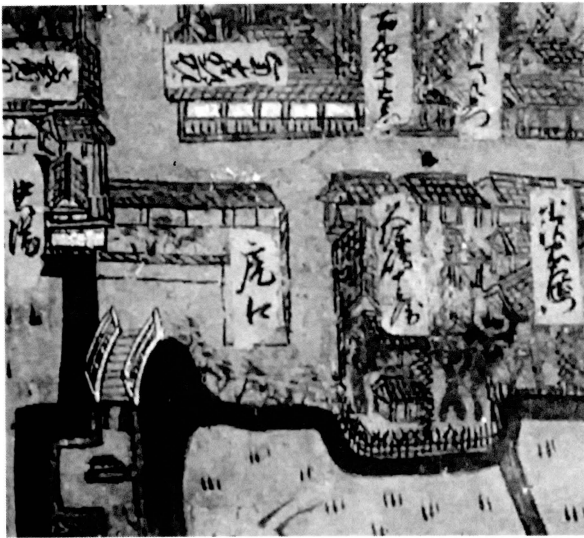


第 2 2 図 柳口周辺遺跡出土磁器 (S=1/3)

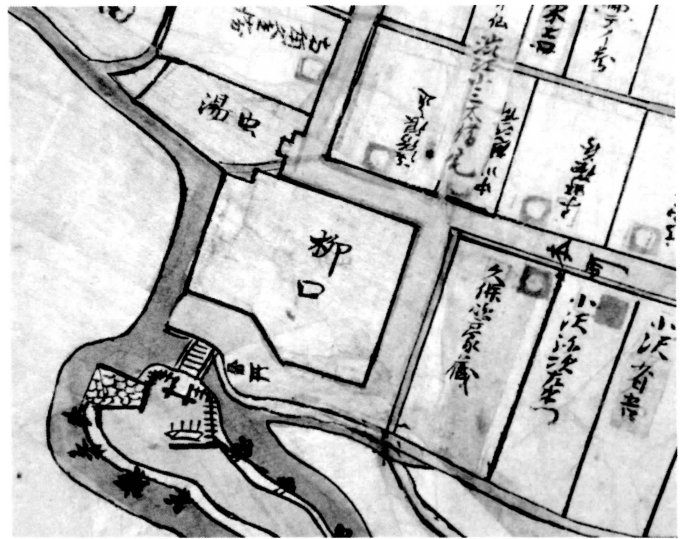
を含む城下を描いた「御枕屏風」(寛文四年・1664年)や「慶応四年城下町絵図」(1868年)を参考に、土地利用をみてみると、1・2次調査地は「柳口役所」の中に位置するとみられる(第23図)。役所という性格から、食器供膳具などを日常的に用いる場所ではなかったため出土量が少ない可能性がある。明治になって高島学校の建設、そして移転後には民有地となって住・商業の場になったために、日常雑器などの遺物量が増えたと考えられる。今回の調査地点では近世遺物が多いが、これは柳口役所の外であるということの傍証ともいえる。「慶応四年城下町絵図」と地割から当該地は道路と推定されていたが、土地所有者の話では屋敷地であったと伝わっているとのことであった。絵図では役所と道を挟んだ向かいには久保嶋十兵衛(御枕屏風)、久保嶋豪蔵(慶応四年城下町絵図)の武家屋敷が描かれているが、道路でなければこの屋敷地の可能性が高い。1グリッドの東西方向に走る溝は水路のようではな

第1表 柳口周辺遺跡出土遺物観察表

番号	時代	器種	法量(cm)	整形・調整	焼成	残量・色調	胎土・特徴	出土位置
21図1	中世	灰釉陶器 小皿	口径 底径 器高 (13.3) — —	ロクロ整形 内外面 施釉	良好	1/10残存 褐色 濃緑褐色釉	緻密、口縁わずかに玉縁、瀬戸美濃産	2G4・5層
21図2	中世	灰釉陶器 壺・皿	— — —	ロクロ整形 内外面 施釉	良好	口縁部小片 暗灰色・褐色	緻密、器厚厚めでやや外反、瀬戸美濃産	1G北壁赤褐色 土遺構
21図3	中世	陶器 壺	— (11.0) —	底部 回転削り 外面 鉄釉 体部 ロクロ整形・削りとなデ	良好	底部小片 暗褐色釉 黒色・茶色釉	緻密、戦国時代の瀬戸産、祖母榎茶壺	1G10層
21図4	中世	灰釉陶器 壺	— — —	ロクロ整形 口縁～外面 施釉	良好	口縁部小片 濃緑黄褐色釉	粗雑、砂粒多量含む、表面発泡痕、室町～鎌倉時代の 中津川産、四耳壺か、5と同一個体	1G6層
21図5	中世	灰釉陶器 壺	— — —	ロクロ整形 内面 ナデ整形	良好	体部小片 黄褐色釉	粗雑、砂粒多量含む、表面発泡痕、室町～鎌倉時代の 中津川産、四耳壺か、4と同一個体	1G北壁赤褐色 土遺構
21図6	中世	灰釉陶器 壺	— — —	ロクロ整形 口縁 施釉	良好	口縁部小片 褐色、濃緑色釉	粗雑、砂粒含む、室町～鎌倉時代の中津川産、4・5 と別個体	1G北壁赤褐色 土遺構
21図7	中世- 近世	陶器 鉢	— (12.8) —	ロクロ整形 底部 回転削り 内 外面 黒鉄釉	良好	底部1/4残存 灰色、黒色釉	緻密、砂粒含む、内面わずかに摩耗、瀬戸美濃産	1G6層 1G10 層
21図8	中世- 近世	陶器 壺	— — —	ロクロ整形 外面 鉄釉 内面釉 薄く刷毛塗り	良好	体部小片 外面黒・暗褐色釉 内面淡褐色	緻密、固く締まる、内面は無釉、瀬戸美濃産	1G北壁赤褐色 土遺構
21図9	近世	陶器 鉢	— (4.0) —	ロクロ整形 内外面 錆鉄釉	良好	底部残存 赤褐色・白色	緻密、砂粒含む、錆鉄釉と白釉まじり、瀬戸美濃産	1G一括
21図10	近世	陶器 皿	(9.8) (3.7) (1.9)	底部～外面 回転削り 内面～口縁 錆鉄釉	良好	1/4残存 淡白色・濃茶褐色	緻密、砂粒含む、灯明皿、瀬戸美濃産	2G7層
21図11	近世	灰釉陶器 皿	(8.0) — —	ロクロ整形 内面～口縁施釉	良好	口縁部小片 淡褐色	緻密、内面にかえり、灯明皿、瀬戸美濃産	1G6層
21図12	近世	灰釉陶器 壺	— — —	ロクロ整形 内外面 施釉	良好	口縁部小片 淡褐色釉	緻密、口縁やや外反、薄い灰釉、貫入、瀬戸美濃産	1G北壁赤褐色 土遺構
21図13	近世	陶器 壺	— — —	ロクロ整形、内外面施釉	良好	体部小片 濃灰色釉 黒灰色	緻密、灰色土で固く締まる、濃い灰釉で貫入、底部 は無釉、産地不明	1G10層
21図14	近世	灰釉陶器 丸壺	— (5.8) —	ロクロ整形 底部回転削り 高台以外施釉	良好	1/6残存 淡灰色 淡緑灰色釉	緻密、角高台、ロクロ目顯著、瀬戸美濃産	1G9層
21図15	近世	灰釉陶器 壺	— (7.8) —	ロクロ整形 外面 施釉	良好	1/6残存 淡褐色 黄緑色釉	緻密、砂粒含む、口縁外屈折、瓶蓋、瀬戸美濃産	2G1層
21図16	近世	灰釉陶器 鉢	— (9.4) —	ロクロ整形 高台以外施釉	良好	底部小片 淡褐色 淡黄褐色釉	緻密、精製土、瀬戸美濃産	1G11層升脇
21図17	近世	陶器 挿針	— — —	内外面 鉄釉・泥付着	良好	口縁部小片 錆赤色釉	緻密、口縁内面に突帯、全体に土がこびりつく	1G10層
21図18	近世	陶器 壺	— — —	ロクロ整形 内外面 施釉	良好	体部小片 内面 暗茶褐色釉 外面 赤褐・黒釉	緻密、鉄釉掛け、瀬戸美濃産	2G7層
21図19	近世	陶器 鉢・壺	— (12.0) —	内外面 鉄釉 底部回転削り・無釉	良好	底部1/8残存 赤茶褐色 黒色釉	緻密、砂粒含む、内外面とも鉄釉、高台端面取り、 瀬戸美濃産か	1G11層折脇
21図20	近世	陶器 鉢	— (15.2) —	ロクロ整形 底部回転削り 内外面 灰釉	良好	底部小片 内外面 緑黄色釉 褐色	緻密、砂粒含む、練鉢、甲鉢、灰釉厚く掛け表面貫 入、底部中央一段削り込む、瀬戸美濃産	1G1・2・3層
21図21	近世	陶器 鉢	— (10.0) —	ロクロ整形 底部回転削り 内外面 施釉 底部無釉	良好	底部小片 素地 暗赤褐色 暗灰色釉	緻密、砂質土、練鉢、固く締まる、灰釉表面は貫 入、地方窯産	1G1・2・3層
21図22	近世	灰釉陶器 植木鉢	(31.7) — —	ロクロ整形 口縁～外面 施釉 内面 無釉	良好	口縁分1/6残存 素地 淡褐色 口縁～外面 施釉 内面 無釉	緻密、口縁を外に屈曲、内面は無釉、被熱、瀬戸美 濃産	1G北壁赤褐色 土遺構
21図23	近世- 近代	陶器 壺	— — —	内外面施釉	良好	口縁部小片 素地 白色 黒・藍・白色釉	緻密、厚く施釉、地方窯	1G一括
21図24	近世- 近代	陶器 瓶	— — —	外面 施釉 内面 無釉	良好	頸部小片 素地 暗褐色 淡緑白色釉	緻密、黒色粒含む、口縁端か	2G1層
21図25	近代	陶器 蓋	9.0 受部6.6 4.0	ロクロ整形 外面灰釉・施文	良好	完形 淡褐色 淡黄褐色釉	緻密、宝珠つまみ、受部垂下、天井に柳・湖絵、土 瓶蓋、瀬戸美濃産または益子産か	1G6層
22図26	近世	磁器 皿	— — —	内外面 染付	良好	底部小片 素地 濁る白色 文様 濃青色	緻密、三角高台、外面圏線、内面に松、中国磁器か	表探
22図27	近世	磁器 皿	— — —	内外面 染付	良好	体部小片 素地 白色 文様 濃・淡青色	緻密、凹凸あるので膽皿か、外面菱、内面桃、被 熱、肥前産	1G9層
22図28	近世	磁器 皿	— — —	内外面 染付	良好	口縁部小片 素地 灰白色 文様 濃・淡青色	緻密、少し外反、器厚厚い、表面貫入、内外面草 花、陶胎磁器、肥前産くらわんか、18C後半	1G1・2・3層
22図29	近世	磁器 碗	— (4.4) —	内外面 染付	良好	底部1/4残存 素地 白色 文様 濃・淡青色	緻密、外面圏線、被熱、肥前産	1G北壁赤褐色 土遺構
22図30	近世	磁器 大皿	— — —	内外面 染付	良好	口縁部小片 素地 灰白色 文様 青色	緻密、外面に圏線、内面草花、口唇錆鉄、被熱、肥 前産、	1G9層
22図31	近世	磁器 段重	(12.0) (9.4) 6.1	外面 染付	良好	1/10残存 素地 白色 文様 濃青色	緻密、体部垂直、口縁端面取し無釉、被熱、外面山 形文、肥前産、最下段、32と組む	1G10層
22図32	近世	磁器 段重	— — —	外面 染付	良好	1/12残存 素地 白色 文様 濃青色	緻密、腰に平坦面、外面山形文、肥前産、31と組 む、31より器高低い	1G10層
22図33	近世	磁器 段重	— — —	外面 染付	良好	体部小片 素地 白色 文様 青色	緻密、口唇面取し無釉、外面草葉・コノ字、肥前産か	表探
22図34	近世	磁器 膽皿	— — —	内面 染付 口唇錆鉄	良好	体部小片 素地 白色 文様 濃・淡青色	緻密、体部ひだ、内面海浜、口唇錆鉄、肥前産、18C 後半	1G10層
22図35	近世	磁器 膽皿	— (9.0) —	内面 染付 蛇の目高台	良好	底部～体部小片 素地 白色 文様 濃・淡青色	緻密、体部ひだ、内面海浜、蛇の目高台、被熱、肥 前産、18C後半	1G北壁赤褐色土遺 構・1G10層
22図36	近世	磁器 膽皿	(14.0) — —	内面 染付	良好	体部小片 素地 淡灰白色 文様 濃・淡青色	緻密、内面草花、口唇錆鉄、肥前産、18C後半	1G9層
22図37	近世	磁器 壺	(9.0) 摘み(4.4) —	内外面 染付	良好	1/6残存 素地 淡灰白色 文様 青～濃青色	緻密、碗蓋、ハの字に開く、外面菊唐草、内面唐 草、被熱、肥前産、18C後半	1G9層・1G一 括
22図38	近世	磁器 壺	(11.4) 摘み(4.2) 3.2	内外面 染付	良好	1/8残存 素地 濁る白色 文様 青色	緻密、碗蓋、腰丸、外面微塵唐草、内面菱割・圏 線、肥前産、18C後半	1G9層
22図39	近世	磁器 徳利	— 5.9 — 高台径5.1	外面 染付	良好	1/2残存 素地 濁る白色 文様 濃青色	緻密、御神酒徳利、外面唐唐草・圏線、内面無釉、 肥前産、18C後半	1G1・2・3層
22図40	近世	磁器 徳利	— (5.8) —	外面 染付	良好	底部小片 素地 灰白色 文様 濃青色	緻密、丸い体部、外面コノ字文、肥前産	1G一括
22図41	近世- 近代	磁器 碗	(9.0) (4.0) 4.95	内外面 染付	良好	1/2残存 素地 白色 文様 濃青色	緻密、光沢強い、湯呑茶碗、外面花唐草、内面圏 線、瀬戸美濃産、江戸末～明治	1G8層
22図42	近世- 近代	磁器 碗	(9.6) — —	内外面 染付	良好	体部小片 素地 白色 文様 濃青色	緻密、外面菊唐草、内面唐唐草、瀬戸美濃産か、江 戸末～明治	2G1層
22図43	近世- 近代	磁器 小皿	9.8 5.0 2.1	内面 染付	良好	略完形 素地 白色 文様 濃青色	緻密、腰強く折れて口縁外反、光沢強い、内面松竹 梅、型作り、瀬戸美濃産、19C	1G北壁赤褐色 土遺構



御枕屏風 部分 八剣神社所有
(諏訪市博物館 2008 より転載)



慶応四年城下町絵図 部分 諏訪市所有 伝来不詳資料

第23図 近世における遺跡周辺の様子を描いた絵図

かったが、地割・土地境界と何らかの関係があったかもしれない。

高島城内では高島一丁目遺跡（二之丸）で近世遺物がまとまって出土しているが、こちらは江戸時代前期（17世紀～18世紀前半）の遺物が目立ち、後期になると減少する。二之丸には家老諏訪家の屋敷があったが、二之丸騒動で御家断絶（天明三年、1783年）となり、その後には藩校「長善館」が置かれたことと関連すると考えられる（中島 2007）。このように、文献資料から伺われる土地利用が発掘調査の結果と対応することは重要な視点である。

今回の調査地の土地利用・性格については現況地割や公図からある程度の復元が可能であろうが、実際の地下の様子ははるかに複雑で重層的なようである。近世城下町遺跡の発掘調査の難しさと重要性を認識させられる。また、包蔵地の範囲について、現在は柳口役所の推定範囲を中心としたごく狭い範囲であるが、城下町や上諏訪宿はさらに広範囲に及んでおり保護や実態解明が必要であると認識している。文献・絵画資料の検討や分布調査を行いながら、包蔵地範囲の検討と保護を進めていきたい。

<引用・参考文献>

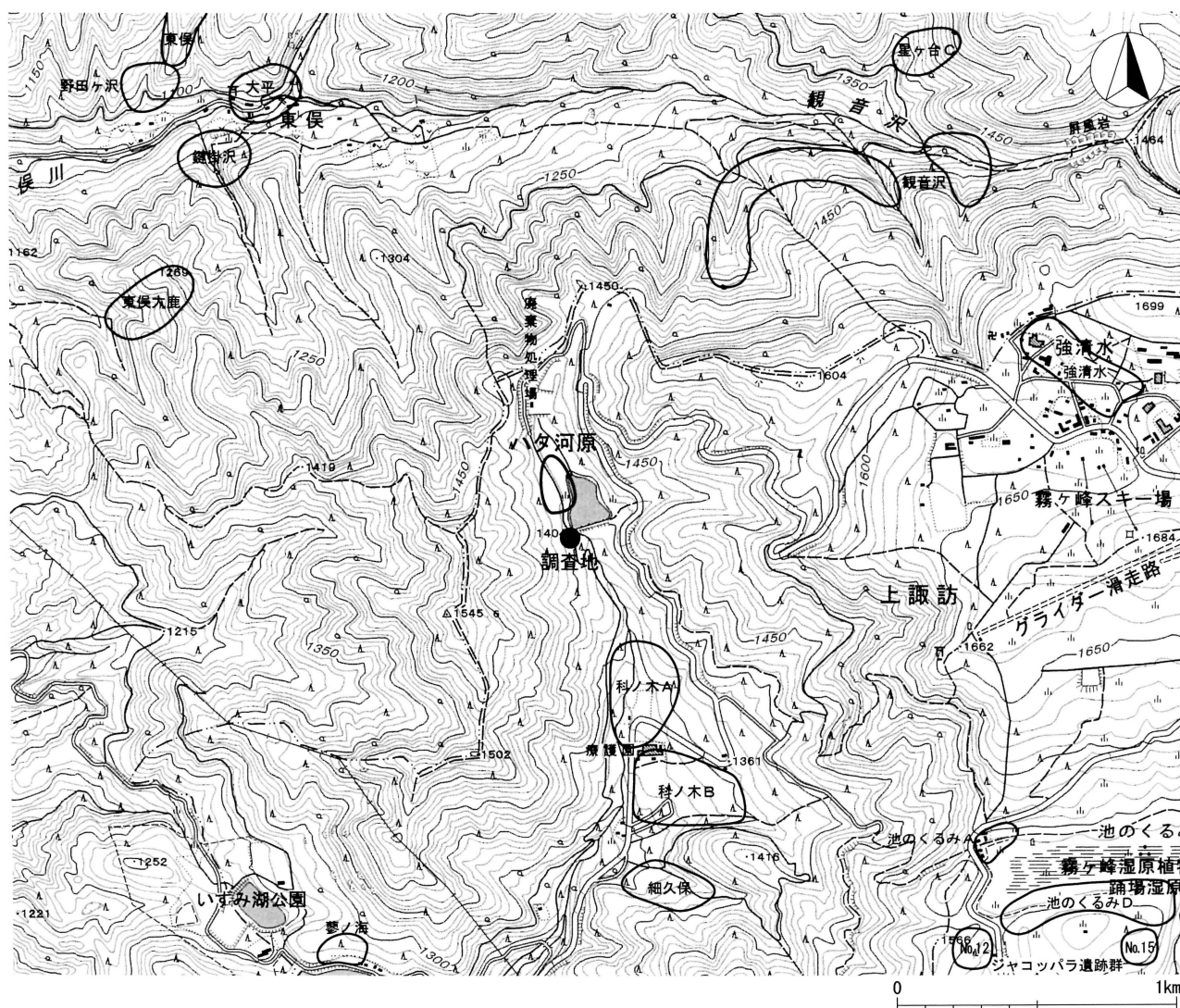
- 浅川清栄 編 1995『図説 高島城と諏訪の城』株式会社郷土出版社
- 九州近世陶磁学会 2001『国内出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる』
- 九州近世陶磁学会 2008『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（東海・北陸・甲信越編）』
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』
- 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの - 生産と流通 - 』
- 諏訪市 1988『諏訪市史』中巻
- 諏訪市教育委員会 2010「柳口周辺遺跡（第3次）」『市内遺跡発掘調査報告書（平成21年度）』
- 諏訪市教育委員会・諏訪市市内遺跡発掘調査団 2009『柳口周辺 - 諏訪市柳口周辺遺跡第2次緊急発掘調査報告書 - 』
- 諏訪市博物館 2008『写真集 八剣神社所蔵 御枕屏風』第2版
- 中島透 2007「高島一丁目遺跡（第2次）」『市内遺跡発掘調査報告書（平成18年度）』諏訪市教育委員会

VIII ハタ河原遺跡（第2次）

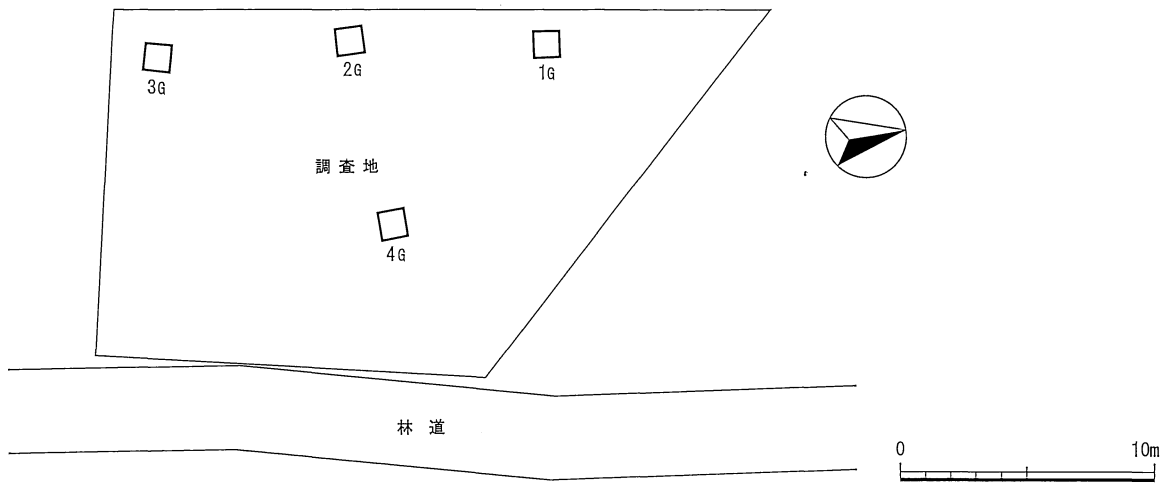
- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市上諏訪角間澤東 12968-1 | 4. 調査目的 森林間伐事業に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成 27 年 9 月 7 日～14 日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 4 m ² | 6. 出土遺物 黒耀石（表採） |

7. 遺跡概要及び調査概要

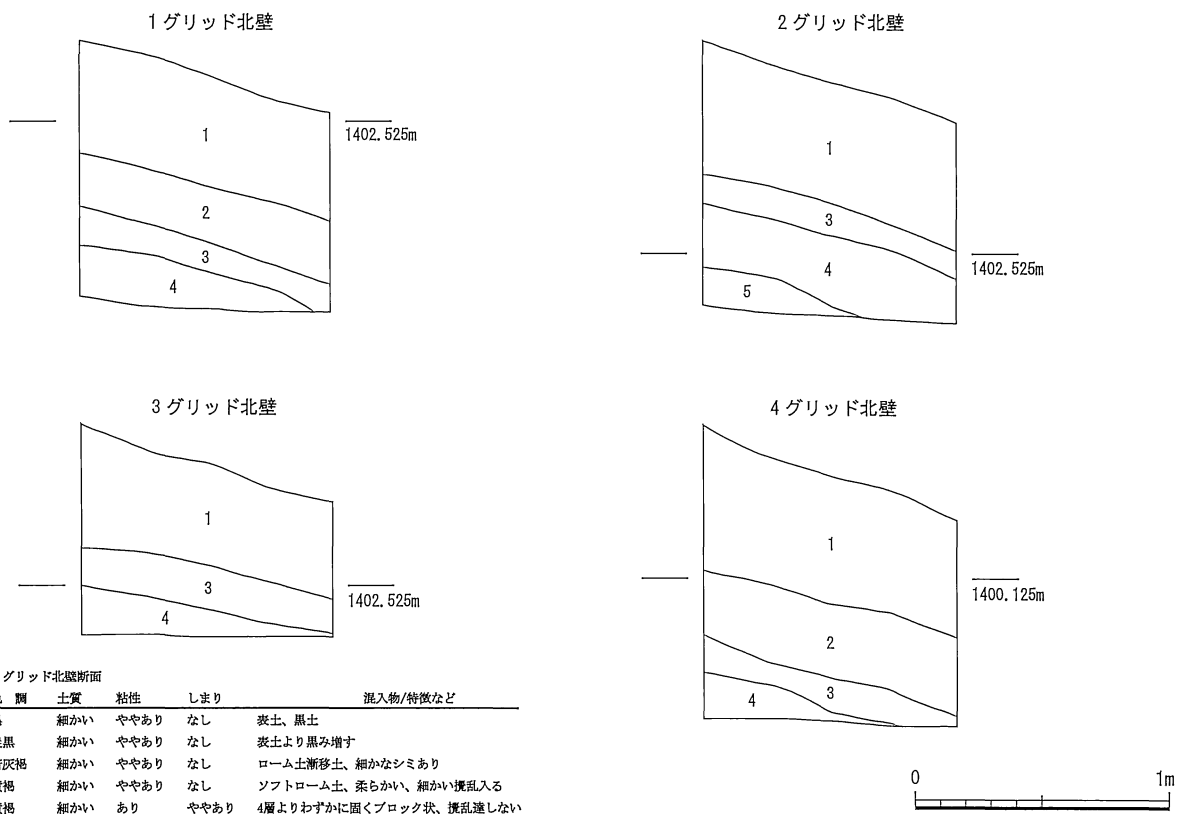
ハタ（旗）河原遺跡は角間川の解析によって形成された谷の最奥部に位置し、標高は 1,400m 程度である（第 24 図）。下諏訪町との境に近く、下諏訪側は観音沢川から砥川へと合流する山間地である。遺跡立地は角間川の源流である科ノ木湿原と呼ばれる小さな湿原一帯にあり、下方には昭和 30 年に造成された溜め池「科ノ木温水溜め池」がある。この溜め池西岸の緩斜面地がハタ河原遺跡とされている。1964 年、林道拡幅工事中に発見され、諏訪市教育委員会と諏訪考古学研究所などによって発掘調査が実施された（第 1 次、中村 1965）。縄文時代早期の竪穴建物跡と土坑、土器・石器を発見している。2004 年から 2005 年には溜め池で改修工事があり、池の水が抜かれた。この際の踏査によって旧石器時代の細石刃石器などが採集されている（中島 2006）。ハタ河原遺跡から下流 1km には科ノ木遺跡、さらに



第 24 図 ハタ河原遺跡位置図 (S=1/25,000)



第 2 5 図 調査地全体図 (S=1/300)

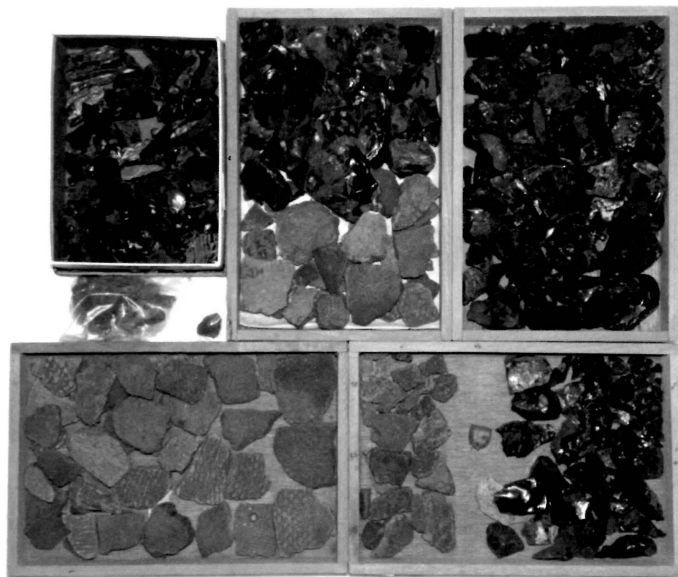


第 2 6 図 調査グリッド断面図 (S=1/30)

500m 下流には細久保遺跡がある。市街地から離れたこの山間地には、縄文時代の早期から前期に属する遺跡が比較的集中する。

今回は市有林内での間伐事業計画に伴い、切り出した樹木の仮置場として林道沿いに平坦地を作る計画を把握したことから協議を行った。調査地は溜め池より南西の急傾斜地で、既存の包蔵地範囲の外である。ただし、第 1 次調査地点の特定ができず、山中で包蔵地範囲の明確な根拠も不明であったことから、分布確認のための試掘調査を実施した。当該地に試掘グリッド 4 箇所を設定し、人力により掘り下げを行った (第 25 図)。

調査の結果、非常にきれいな黒色土の自然堆積が 50cm から 60cm あり、漸移層を経て濃黄褐色のソフ



第1次調査出土遺物（一部 諏訪地域考古資料）



溜め池工事時の表採遺物（一部）



今回の表採遺物
（溜め池周辺）

第27図 ハタ河原遺跡出土遺物

トローム土になった（第26図）。各層は現地表面の傾斜と並行して乱れることなく堆積し、石などの含有物もなく自然堆積と判断された。

今回の調査結果から、当該地および周辺の斜面傾斜がやや急な一帯は遺跡の分布はないものと考えられる。工事実施にあたって保護措置を講じる必要はないとした。

8. 総括

今回の調査では遺構・遺物の検出は無かったが、過去に出土している黒耀石の量が多い印象をもつ（第27図）。1964年の発掘では518点あり、剥片は比較的大きいものがある（諏訪市博物館2011）。また、溜め池工事時の採集も同様であった。遺物の年代は、細石刃核があることから旧石器時代終わりから、遺構を確認している縄文時代にかけてで、多くは縄文時代に属するとみられる。この供給元は遺跡北側の各所にみられる原産地遺跡であろう。最も近いところでは観音沢があり、星ヶ台も関連するだろう。石の特徴は灰色霜降り状のもの、ブルーブラック、透明系と混在しており、上述の原産地いずれかで見られる特徴である（下諏訪町教育委員会2001・2008）。

縄文時代では科ノ木遺跡や細久保遺跡などの山間地遺跡との関連も推定されるであろう。また、蓼ノ海遺跡も詳細不明ながら早・前期の遺跡とされている。諏訪湖盆と霧ヶ峰の中間に位置するこの山間地に営まれたこれらの遺跡については黒耀石の交易・流通と何らかの関わりをもっていたことであろう。遺跡の実態解明は重要な課題である。

<引用・参考文献>

下諏訪町教育委員会 2001 『黒耀石原産地遺跡分布調査報告書Ⅰ-和田峠・霧ヶ峰-』

下諏訪町教育委員会 2008 『黒耀石原産地遺跡分布調査報告書Ⅱ-星ヶ塔遺跡-』

諏訪市博物館 2011 『諏訪地域考古資料 藤森栄一蒐集品目録』

中島透 2006 「諏訪市科ノ木採集の細石器について」『長野県考古学会誌』117 長野県考古学会

中村龍雄 1965 「諏訪市明星屋敷・ハタ河原遺跡調査報告-高原地帯における縄文早期遺跡の様相-」『信濃』第17巻第4号

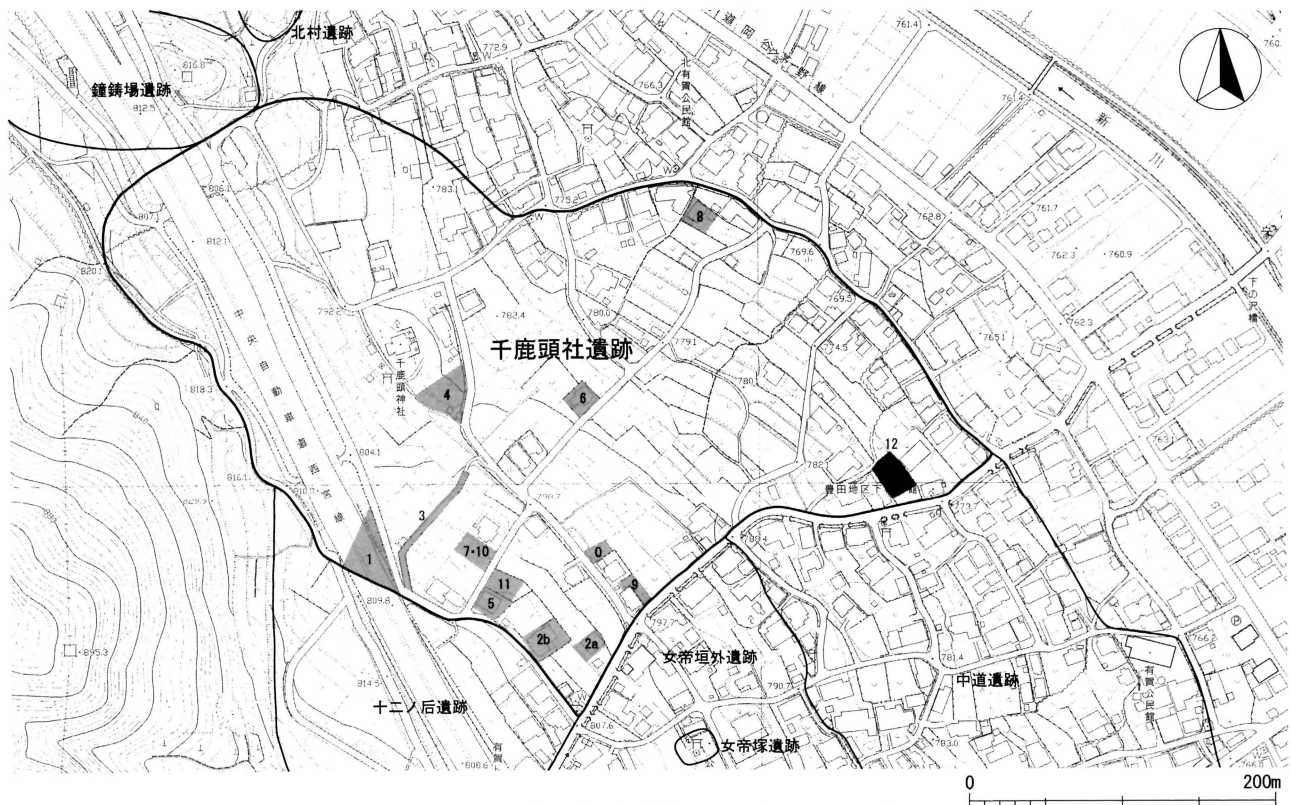
IX 千鹿頭社遺跡（第12次）

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 所在地 諏訪市豊田下村 3728-1 | 4. 調査目的 公民館建設に係る試掘確認調査 |
| 2. 調査期間 平成27年11月9日～11日 | 5. 検出遺構 なし |
| 3. 調査面積 17㎡ | 6. 出土遺物 土器・陶器（古代・中世・近世） |

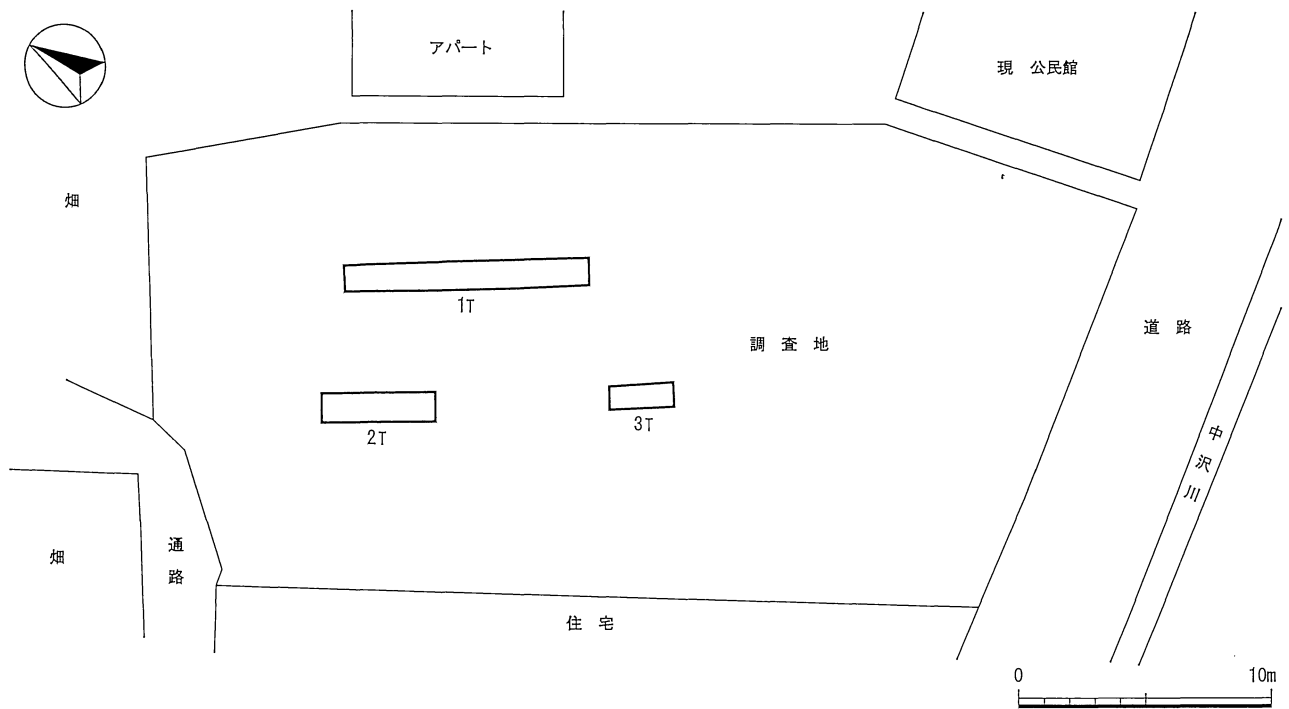
7. 遺跡概要及び調査概要

千鹿頭社遺跡は諏訪湖西側の緩斜面に立地する集落遺跡で、有賀峠直下に広がる中沢川の扇状地上にある（第28図）。有賀峠は諏訪盆地と伊那谷を結ぶ交通の要所として知られる。南西に接する十二ノ后遺跡とは一体的な遺跡で、縄文時代から平安時代に至るまで大規模な集落が形成されている場所である。過去に11度12地点において調査が実施されており、とくに昭和49から50年の中央自動車道建設工事に伴う発掘調査で縄文時代と平安時代の竪穴建物跡を多数検出している（長野県教育委員会1975）。

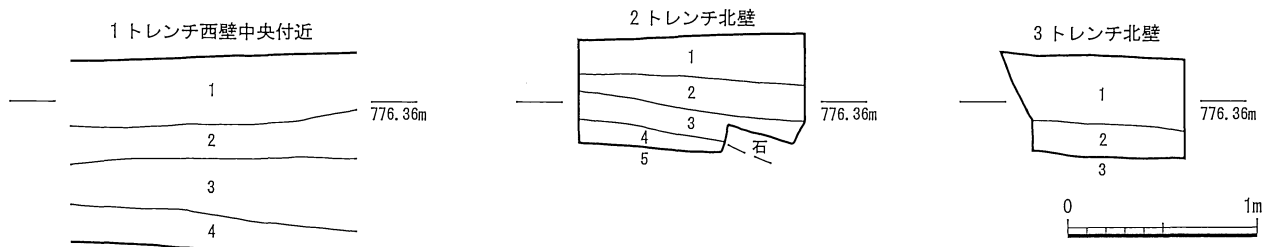
今回の調査地は遺跡東端、扇状地下方の斜面地で標高は約777m前後である。遺構が集中している一帯からは30mほど低いところに位置する。以前には住宅があったが、現在は更地で駐車場として利用されていた。東側にある公民館の当該地への移転建て替えのための事前調査である（第29図）。南北方向に3本のトレンチを設定し、重機および人力で掘り下げを行った。石や大きな岩も含む二次堆積ローム土または一度造成が加わったとみられる黒色土が確認された（第30図）。黒色土から土器器高坏脚部や甕底部、須恵器坏、内耳鍋や近世瀬戸美濃産灰釉碗が出土したが、いずれも小片で1・2点の出土であり、当該地に遺構分布があったとは考えにくい状況であった。おそらく周囲（斜面上方）からの流れ込みであろう。3トレンチは深さ50cmで水道管が南北方向に埋設されていた。1トレンチでは1m、2ト



第28図 千鹿頭社遺跡位置図 (S=1/5,000)



第29図 調査地全体図 (S=1/300)



1トレンチ西壁中央付近断面

色類	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1 暗灰褐	細かい	なし	ややあり	表土、造成土
2 暗灰褐	細かい	なし	ややあり	小石・赤色粒含む、自然堆積か
3 暗灰褐	細かい	なし	ややあり	小石～拳大石多量含む、角取れた円礫、自然堆積か
4 暗黄褐	細・粗	ややあり	ややあり	小石～20cm大石含む、砂粒含む、二次堆積ローム土

3トレンチ北壁断面

層 色類	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1 暗灰褐	細かい	ややあり	強くあり	表土、砂利や炭化物含む、整地土
2 暗灰褐・暗黄褐	細かい	ややあり	あり	ローム漸移土、丸い小石多く含む
3 淡黄褐	細かい	ややあり	あり	ローム土、小石～拳大石多量含む

2トレンチ北壁断面

層 色類	土質	粘性	しまり	混入物/特徴など
1 暗灰褐	細かい	ややあり	ややあり	表土、畑耕作土か、石含む
2 暗灰黒	細かい	ややあり	ややあり	色調は黒み強くなる、石含む
3 暗赤・暗灰	細かい	ややあり	ややあり	塊状に赤く変色、水分含む、拳～人頭大石多く含む
4 暗黄褐	細かい	ややあり	ややあり	ローム漸移土、石含む
5 黄褐	細かい	あり	あり	石多量に含むローム土、湧水、二次堆積ローム土か

第30図 調査トレンチ断面図 (S=1/40)

レンチは50cmの深さで水が湧いてきた。大よそ黒色土とローム土の境にあたる。1トレンチ北側では元の住宅に関連したとみられる石組と攪乱土を確認した。以上の調査結果から遺構などの分布はみられず、今後の建物建設工事による遺跡への影響は無いと判断され、調査は終了した。

8. 総括

今回の調査地は遺跡の中でも低い場所である。そのためか、石を多量に含む二次堆積土に、わずかに土器片が混ざるような様相で、中沢川に起因する土石堆積が厚いことが確認された。遺跡の中心は西側の高速道路周辺の一帯であることはほぼ間違いない。その範囲の広がりを把握することが必要であり、今回の発掘結果も有益なものであった。

<引用・参考文献>

長野県教育委員会 1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 諏訪市・その3 -』

写真図版



諏訪神社上社遺跡齋庭内全景（北から）



調査前（北西から）



調査地全景（北東から）



トレンチ完掘（南東から）



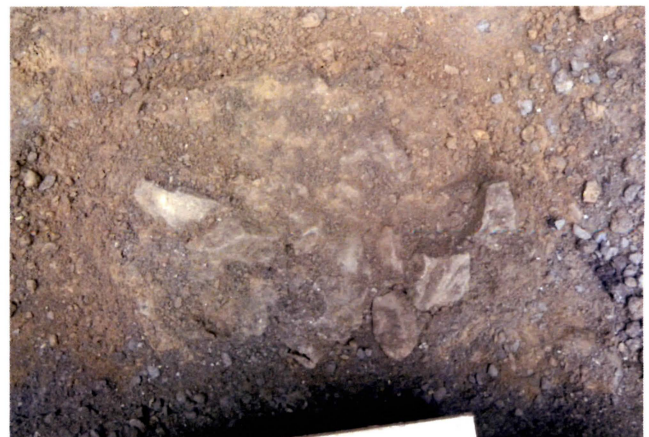
サブトレンチ（北西から）



サブトレンチ（南東から）



石群1（北東から）



石群2（北東から）



中道遺跡第6次調査地全景（西から）



1 グリッド完掘（南から）



1 グリッド東壁（西から）



2 グリッド完掘（南から）



金子城跡調査地全景（南東から）



八幡社（南東から）



1 グリッド北壁（南から）



2 グリッド北壁（南から）



3グリッド完掘 (南から)



4グリッド完掘 (南から)



南沢遺跡遠景 (西から)



調査地全景 (南から)



1グリッド完掘 (南から)



2グリッド完掘 (南から)



2グリッド深堀底面 (南から)



3グリッド完掘 (南から)



中道遺跡第7次調査地全景（南から）



1グリッド完掘（南から）



2グリッド完掘（南から）



柳口周辺遺跡調査地解体前（東から）



調査地全景（西から）



1グリッド完掘（北から）



1グリッド南壁（北から）



1グリッド南西隅検出の枡近景（北から）



1 グリッド東壁 (西から)



土坑検出状況 (北から)



2 グリッド完掘 (南から)



2 グリッド北壁 (南から)



ハタ河原遺跡遠景 (南から、溜め池堰堤より)



調査地全景 (南から、右奥が溜め池)



1 グリッド完掘 (南から)



2 グリッド北壁 (南から)



3 グリッド完掘 (南から)



4 グリッド完掘 (南から)



千鹿頭社遺跡調査地全景 (南から)



1 トレンチ完掘 (南から)



1 トレンチ西壁中央付近 (東から)



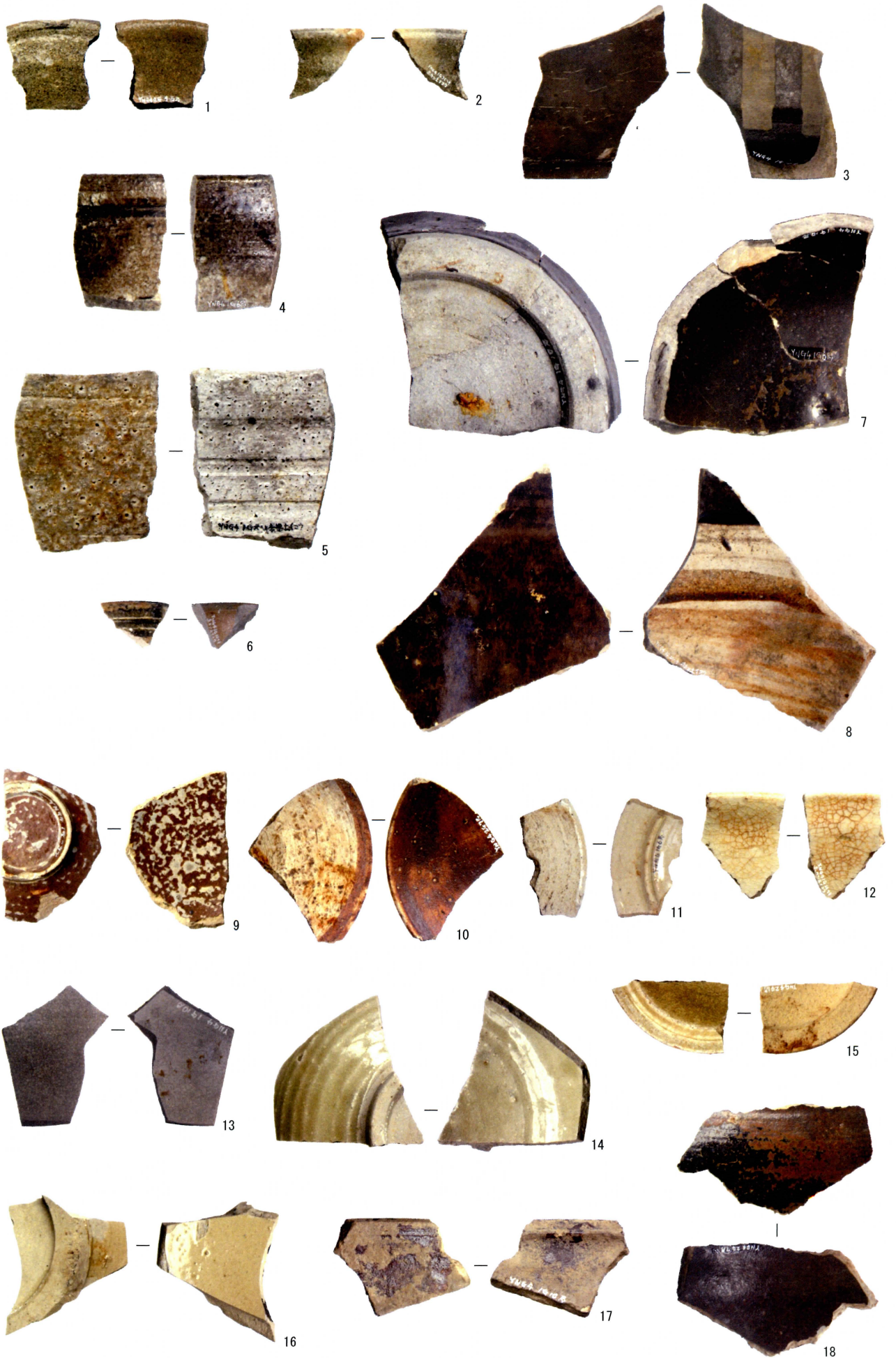
2 トレンチ完掘 (南から)



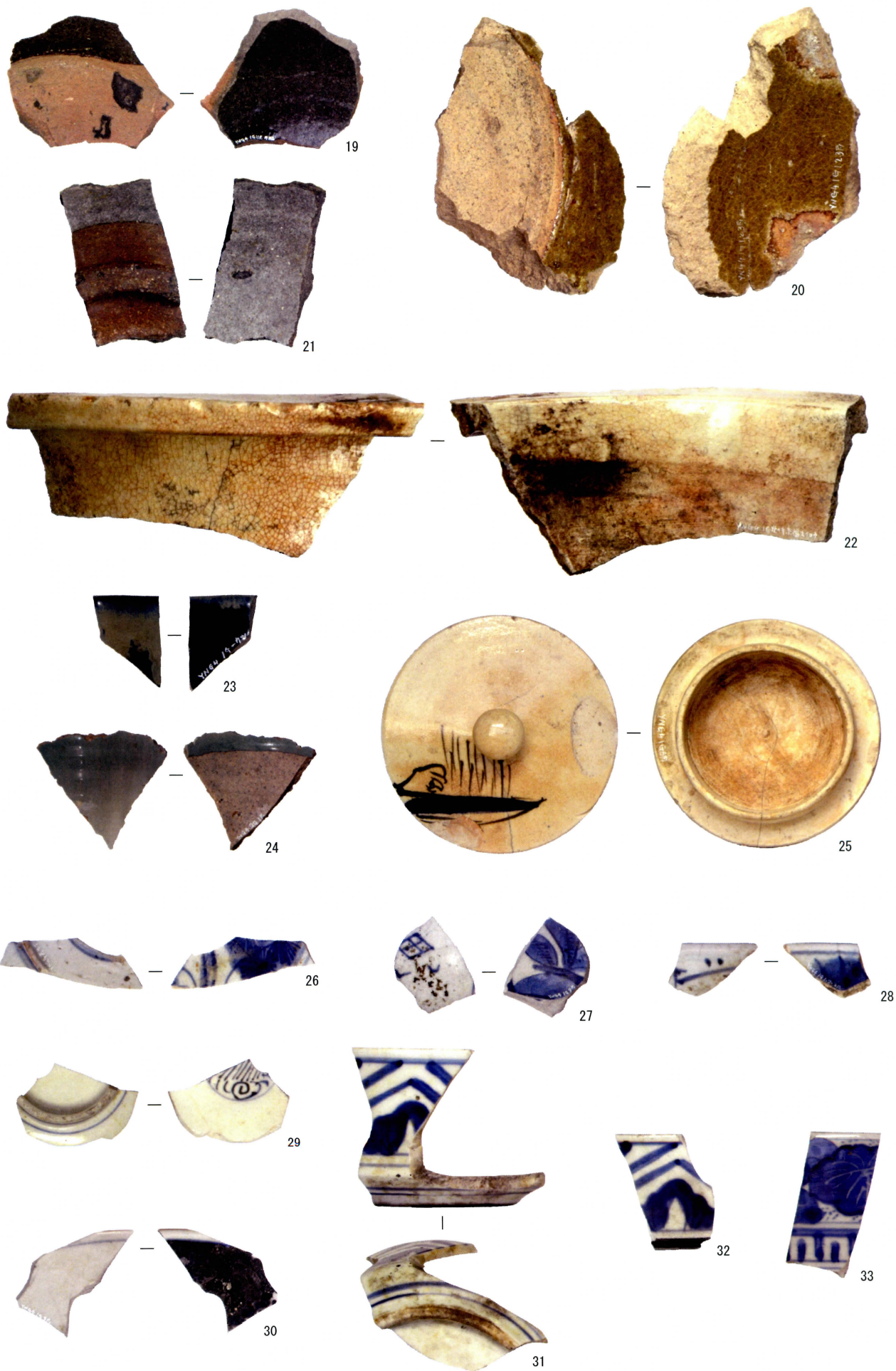
3 トレンチ完掘 (南から)



重機による埋め戻しの様子 (北から)



柳口周辺遺跡出土遺物 (1)



柳口周辺遺跡出土遺物 (2)



柳口周边遗迹出土遗物 (3)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくつちようさほうこくしょへいせいにじゅうななねんど
書名	市内遺跡発掘調査報告書（平成27年度）
副書名	長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	諏訪市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第76集
編著者名	児玉 利一
編集機関	諏訪市教育委員会
所在地	〒392-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 電話0266-52-4141
発行年月日	平成28（2016）年3月25日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	。 / 〃	。 / 〃		
ずわじんじゃかみしやいせき 諏訪神社上社遺跡	ずわしなかずみやま 諏訪市中洲宮山1	20206	352	35° 59' 53"	138° 07' 09"	20150416 ～ 20150417	3.5 石畳敷設に係る試掘・確認調査
なかみちいせき 中道遺跡	ずわしとよだななみち 諏訪市豊田中道 3424-5他	20206	315	36° 01' 10"	138° 05' 09"	20150420 ～ 20150422	4 個人住宅建設に係る試掘・確認調査
かねこじょうあと 金子城跡	ずわしなかずうちだ 諏訪市中洲内田4012-2	20206	359	36° 00' 44"	138° 07' 05"	20150422 ～ 20150427	7 土地売買に係る試掘・確認調査
みなみざわいせき 南沢遺跡	ずわしこなみなみざわ 諏訪市湖南南澤4617他	20206	329	36° 00' 28"	138° 05' 53"	20150511 ～ 20150514	6 個人住宅建設に係る試掘・確認調査
なかみちいせき 中道遺跡	ずわしとよだななみち 諏訪市豊田中道 3442-1他	20206	315	36° 01' 09"	138° 05' 09"	20150707 ～ 20150710	4 個人住宅建設に係る試掘・確認調査
やなぎぐちしゅうへんいせき 柳口周辺遺跡	ずわしすわいっちようめ 諏訪市諏訪一丁目2989-7	20206	56	36° 02' 41"	138° 07' 03"	20150810 ～ 20150812	8 個人住宅建設に係る試掘・確認調査
はたがわらいせき ハタ河原遺跡	ずわしかみすわかくまざわひがし 諏訪市上諏訪角間澤東 12968-1	20206	407	36° 05' 40"	138° 08' 29"	20150907 ～ 20150914	4 森林間伐事業に係る試掘・確認調査
ちかとうしやいせき 千鹿頭社遺跡	ずわしとよだしむむら 諏訪市豊田下村3728-1	20206	305	36° 01' 19"	138° 05' 06"	20151109 ～ 20151111	17 公民館建設に係る試掘・確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪神社上社遺跡	社寺	中世・近世・近代			
中道遺跡（第6次）	集落	縄文～近世			
金子城跡	城館	中世・近世・近代			
南沢遺跡	散布地	縄文～近世		黒耀石・陶器・樹木片	
中道遺跡（第7次）	集落	古代～近世		土師器・須恵器・陶磁器	
柳口周辺遺跡	集落	中世・近世・近代	溝・土坑	陶器・磁器・木製品・ガラス	
ハタ河原遺跡	集落	旧石器・縄文		黒耀石（表採）	
千鹿頭社遺跡	集落	古代～近世		土師器・須恵器・内耳鍋・灰釉陶器	

要約	<ul style="list-style-type: none"> ・諏訪神社上社遺跡 第8次:遺構・遺物なし。 ・中道遺跡 第6次:遺構・遺物なし。 ・金子城跡 第11次:遺構・遺物なし。 ・南沢遺跡 第2次:遺構なし、掘り下げ最下層中から樹木片出土。人為的かは不明。 ・中道遺跡 第7次:遺構なし、土器片がわずかに出土。 ・柳口周辺遺跡 第4次:中世から近代にかけての遺物包含層を確認。多数の遺構などが切り合い重複する。 ・ハタ河原遺跡 第2次:遺構・遺物なし。遺跡の分布範囲外と確認。 ・千鹿頭社遺跡 第12次:遺構なし、土器片がわずかに出土。
----	--

市内遺跡発掘調査報告書（平成27年度）

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

平成28年3月25日

編集・発行 長野県諏訪市高島1-22-30

諏訪市教育委員会

印刷 有限会社増澤印刷所